

第13回

川に学ぶ体験活動 全国大会 in にいがた見附

テーマ：地域の防災力を高める



報告書



平成25年10月12日^土・13日^日・14日^{月祝}

見附市文化ホール アルカディア 小ホール

主催■第13回川に学ぶ体験活動全国大会inにいがた見附実行委員会

共催■NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会

後援■国土交通省、文部科学省、環境省、新潟県、新潟日報社、朝日新聞新潟総局、共同通信社新潟支局、産経新聞新潟支局、時事通信社新潟支局、日本経済新聞社長岡支局、毎日新聞新潟支局、BSN新潟放送、N S T、TeNYテレビ新潟、UX新潟テレビ21、エフエムラジオ新潟、FM PORT 79.0、FMなごか80.7、長岡市、三条市、見附市教育委員会、公益財団法人河川財団、公益社団法人日本河川協会、一般財団法人河川情報センター、NPO法人自然体験活動推進協議会、一般社団法人北陸地域づくり協会、公益財団法人リバーフロント研究所（順不同）

この大会は、〈公益財団法人河川財団河川整備基金〉の助成を受けています。

第13回

川に学ぶ体験活動 全国大会 in にいがた見附

テーマ：地域の防災力を高める



報告書



平成25年10月12日^土・13日^日・14日^{月祝}

見附市文化ホール アルカディア 小ホール

主催■第13回川に学ぶ体験活動全国大会inにいがた見附実行委員会

共催■NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会

後援■国土交通省、文部科学省、環境省、新潟県、新潟日報社、朝日新聞新潟総局、共同通信社新潟支局、産経新聞新潟支局、時事通信社新潟支局、日本経済新聞社長岡支局、毎日新聞新潟支局、BSN新潟放送、N S T、TeNYテレビ新潟、UX新潟テレビ21、エフエムラジオ新潟、FM PORT 79.0、FMながおか80.7、長岡市、三条市、見附市教育委員会、公益財団法人河川財団、公益社団法人日本河川協会、一般財団法人河川情報センター、NPO法人自然体験活動推進協議会、一般社団法人北陸地域づくり協会、公益財団法人リバーフロント研究所（順不同）

この大会は、〈公益財団法人河川財団河川整備基金〉の助成を受けています。

報告書目次

4	…	活動記録
	1日目	開会式
		基調講演 「地球を歩いて見たこと、聞いたこと、考えたこと」 探検家・医師・武蔵野美術大学教授 関野 吉晴 氏
5	…	パネルディスカッション 「地域の防災力を高める ～今こそ川の指導者の出番だ!～」
6	…	活動事例報告
8	…	交流会
9	…	2日目 分科会活動〔第1分科会、第2分科会、第3分科会、第4分科会〕 分科会報告
12	…	全大会(閉会式)
13	…	日本一の大河・信濃川川下り
16	…	3日目 エクスカーション
18	…	資料編① 講演録要旨、議事録要旨 基調講演
26	…	パネルディスカッション
32	…	分科会 ・第1分科会
34	…	・第2分科会
35	…	・第3分科会
37	…	・第4分科会
39	…	資料編② 実行委員会・運営委員会・事務局名簿
40	…	資料編③ 当日配布プログラム



1日目 10月12日(土) 会場:見附市文化ホールアルカディア 小ホール

開 会 式 13:00～

【主催者挨拶】

大会実行委員会 委員長 久住 時男

NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 副代表理事 藤芳 素生

【祝 辞】

国土交通省北陸地方整備局河川部長 入江 靖 様
(代理 土木部長 田宮 強志 様)

新潟県知事 泉田 裕彦 様



久住委員長による主催者挨拶

基調講演 14:40～

【演 題】

『地球を歩いて見たこと、聞いたこと、考えたこと』

【講 師】

探検家・医師・武蔵野美術大学教授 関野 吉晴 氏

【講演概要】

アフリカで誕生した人類が南米最南端にいたる道を逆ルートでたどる「グレートジャーニー」に挑んだ関野氏が、10年かけて踏破した道のりを紹介。その後さらに10年かけて挑んだ、アフリカから日本列島にきた人類の足跡をたどる「新グレートジャーニー」についてご紹介いただきました。失敗を重ねながら「グレートジャーニー」「新グレートジャーニー」という大きな旅を成功させるまでの苦労、世界各地の民族との交流の様子、大会のテーマに沿った川にまつわるエピソードなど、美しく迫力いっぱいの写真とともにお話しいただきました。

(→講演の詳細については、18ページ「基調講演 講演録」参照)

【講師プロフィール】

一橋大学在学中に探検部を創設、アマゾン全域踏査隊長としてアマゾン川全域を下る。その後医師となり、南米への旅を重ねる。1993年から2002年にかけて、アフリカで誕生した人類がユーラシア大陸を通してアメリカ大陸に拡散した道を、南米最南端から逆ルートでたどる「グレートジャーニー」に挑んだ。2004年からは「新グレートジャーニー 日本列島にやって来た人々」をスタート。シベリアから稚内までの「北方ルート」、ヒマラヤからインドシナを経由して朝鮮半島から対馬までの「中央ルート」、インドネシア・スラウェシ島から石垣島までの「海のルート」を踏破。著書、写真集多数。1999年植村直己冒険賞受賞。



聴衆に語りかける
関野 吉晴 氏



パネルディスカッション 14:50～15:40

【テーマ】

「地域の防災力を高める ～今こそ川の指導者の出番だ!～」

【コーディネーター】

平山 康弘 氏 (NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 理事)

【パネリスト】

渥美 雅裕 氏 (国土交通省水管理・国土保全局河川環境課課長)

山口 玲子 氏 (見附市立名木野小学校長)

佐藤ともえ 氏 (NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 理事)

久住 時男 氏 (見附市長)

地域の防災力向上のためには、子どもたちの防災教育に取り組む必要がある。子どもたちの生きる力や人間力を育み、いざ災害が起こった時に生き延びることができる実践的なスキルを身に付け、その子どもたちが成長していくことで、地域全体の防災力につなげる。

そのための取り組みの一環として、見附市で行われた『防災キャンプ』を紹介。

防災キャンプを実施するには、教育委員会だけではなく、保護者、地域コミュニティ協議会、消防本部、行政、そして子どもたちと一緒に学校へ泊まり込み、指導者として重要な役割を果たすRACリーダーなど、さまざまな団体の協力が不可欠である。

子どもたちが自然を楽しみ、その魅力を体感すると同時に、それぞれの地域に根差した自然の脅威を理解して災害に対処するためのスキルを身に付けなくてはならない。そのための取り組みを通じて、行政と民間団体が連携した地域全体のネットワークづくりと防災力向上につながっていく。こうした取り組みは、全国に広がっていくであろうし、その中でRACリーダーの存在はますます重要となっていくと考えられる。

皆が川を重要なパートナーとして捉え、今後のRACリーダーの各地域での活躍を期待する。

(→パネルディスカッションの詳細については、26ページ 議事録参照)



コーディネーター
平山 康弘 氏



渥美 雅裕 氏



山口 玲子 氏



佐藤 ともえ 氏



久住 時男 氏

活動事例報告 15:50~17:20



【地元活動事例報告】

1. 刈谷田川かわまちづくり実行委員会 【刈谷田川かわまちづくり実行委員会 副代表 名古屋 茂樹 氏】
地元の刈谷田川で活動している団体。刈谷田川は信濃川の下流域にあり、洪水との戦いの歴史を持っている。

平成16年の「7・13水害」以降、屈曲部の川筋をショートカットして流れを緩やかにしたり、田んぼダム事業など多くの対策を行い効果を上げているが、川は怖いところという意識は変わらない。

そんな意識を変えて、川辺を交流の場、人が集まり楽しむ空間にしていこうと、かわまちづくり事業に取り組んでいる。道の駅を整備し、堤防の天端舗装に伴うサイクリングロードの整備や案内表示の設置など、行政がハード面での整備を進める一方、我々はソフト事業を担っている。地域の13団体が集まり、みんなでアイデアや知恵を出し合っ、チャレンジ24kmウォークや音楽祭、刈谷田川フェスティバルなど、さまざまな事業を実施している。小さな団体だが、今後も市民が河川に集えるよう取り組みを進めたい。

2. 見附市教育委員会 【見附市教育委員会 学校教育課 課長補佐 神林 俊之 氏】

過去の水害の経験から、市内の学校で防災教育を推進してきたが、東日本大震災により内容の見直しを迫られた。そして現在、小学生が学校に宿泊して防災や災害時の対処法などの実際的なスキルを身に付ける防災キャンプを実施している。

防災キャンプは、地域総がかりの取り組み。市役所、地域コミュニティ協議会や消防、さまざまな団体との連携が必要となる。中でもRACとの協働は非常に有効だった。

この取り組みにより、多くの波及効果があった。子どもたちに、災害を知り、対応ノウハウを身に付けてもらうと同時に、自然の豊かさを体験し、川を楽しむ方法を理解させることができた。また地域の各団体や保護者との連携をはかることができた。6月の全市一斉防災訓練では、防災キャンプに参加した小学生の9割が参加し、保護者を含めた地域全体の防災意識を高めることにつながった。

今年度は地域の特色を生かし、学校がより主体的に実施する。今後も発展を目指したい。

3. NPO法人 キズナの森 【NPO法人 キズナの森 理事 佐藤 菜穂子 氏】

(平成16年の「7・13水害」の際、中之島保育園で孤立し、自衛隊のヘリで救助された子どもたちが発表者とともに登壇。今は中学生になった子どもたちによる災害時の記憶が、当時の現場の映像と共に伝えられた。)

水害後、刈谷田川利活用検討委員会が立ち上がり、行政と市民との話し合いが行われた。その活動を通して、中之島と今町の住民の絆が生まれ、協議会が立ち上がり、現在はNPO法人キズナの森として活動を行っている。東日本大震災の時は避難者への炊き出し支援、芝桜の植栽やハロウィンイベント、追悼祭など、さまざまなイベントを実施。2年目からは川に関する防災活動にも力を注いでいる。この水害の記憶を忘れないよう、また地域のキズナとなる活動を今後も続けていく。

4. NPO法人 MTNサポート [NPO法人 MTNサポート 理事 高橋 実 氏]

見附市の隣、長岡市で、信濃川の支流である渋海川での活動を紹介。

小学4年生の総合学習として、川での生き物調査、カヌー体験などの自然体験活動に取り組んでいる。我々の活動自体は5年目を迎えた。

昔から暴れ川だった渋海川が、どこからどこへ流れているのか、江戸時代に流路を変更した瀬替えの現場を見る。カヌー体験、川流れなども実施。担任の先生と協力をしながら入念な事前調査を行う。

河川パトロールや、川に生息する生き物の観察も行っている。渋海小学校で平成9年から飼育・放流を実施。成果として鮭の遡上が確認された。今後も生物データの蓄積に取り組んでいきたい。

5. 財団法人 魚沼市地域づくり振興公社 [財団法人 魚沼市地域づくり振興公社 今井 正樹 氏]

6年前に中越地域でRACリーダー同士が結び付き、関越地域連携協議会として活動している。寺泊、群馬の水上市、千葉の印旛沼、お台場などのEボート大会との交流もしており、人の交流を拡大している。その中で情報発信、水辺の活動を行っている。

信濃川流域では、伊達市の小学校の体験活動、長岡市上川西小学校の活動支援、魚野川でのEボート、長岡の国営越後丘陵公園では雪上Eボートにも取り組み、南魚沼市、地元の奥只見湖など。Eボートを観光資源として商品化していく計画に取り組みたい。

現在、魚沼市では川の駅のような拠点となる場所がないので、拠点をつくりたい。地域交流・流域交流に引き続き取り組みながら、今後は防災教育などにも取り組んでいきたいと考えている。

【全国活動事例報告】

6. NPO法人 会津阿賀川流域ネットワーク [NPO法人 会津阿賀川流域ネットワーク 理事長 高橋 利雄 氏]

阿賀川の上流で、地域安全確保、河川管理業務を続けている。直轄河川では全国で唯一の、住民参加による堤防除草を行っている。「みんなで守ろう地域の河川」をスローガンとして行う河川管理活動支援は、多岐に渡る相乗効果が出ており、継続してほしいという要望もたくさんいただいている。地域の水防力の強化にもつながっている。

河川除草にNPOが参加するにあたっては、役務提供の資格を得た上で一般競争入札に参加。河川堤防除草は有償、河川管理施設の安全点検、情報発信、美化活動、河川環境保全保護は自主的に実施。堤防除草は沿線13行政区、5団体の協力で実施している。

まだまだ課題も多いが、今後も活動を進めていきたい。

7. NPO法人 ひむか体験ワールド (ノベ☆スタ) [NPO法人 ひむか体験ワールド 事務局長 成崎 聡 氏]

宮城県延岡市で、案内人による体験サポートを行っている。案内人は30人。目的はアウトドアを活用した観光促進。当初は地元観光協会の事務局で運営を行っていたが、平成24年にNPO法人化した。

延岡市は九州北部にあり、工業地帯のイメージがある。観光事業においては後発。

現在、山、川、海辺をフィールドに活動を展開している。すべて1時間以内で行けるエリア。地域づくりコーディネーターが2名。それを活用しながら、県内ホテルの自然体験プログラム受け入れ、フットパス事業、教育旅行の誘致などにも取り組んでいる。

プログラムによって人気が偏るので、案内人がたくさんいても機能していない。常勤ではないので、結果的にはほとんど私に対応することになる。天候に応じた団体への対応、体験フィールドの荒廃、運営資金の不足など、これからの課題。

8. NPO法人 長良川環境レンジャー協会 [NPO法人 長良川環境レンジャー協会 学生会員 田中 利弥 氏]

高校生の時からレンジャーとして参加している。長良川をフィールドに、毎年こどもの水辺安全教育講座を実施して10年になる。自分は初年度から参加している。平成21年から活動エリアを広げて、岐阜県を通る木曽三川（長良川、木曽川、揖斐川）で活動している。平成19年度からは、地域で活躍するエコリーダー育成プログラムを考え、小中学生を対象とした「ながらっこレンジャー」を募集している。継続的な活動は大きく

分けて4つ。

①木曾三川水生生物調査体験学習会、②流域の小中学校との野外教育出前講座、③子どもの水辺安全講座、④ながらっ子レンジャー自然体験活動。

子どもたちは自然体験活動を通して、地域の自然や文化に親しみ、協調性を培うことができる。また、エコリーダーとして成長することを期待している。

9. 目黒川流域交流会 〔目黒川流域交流会 世話人 原 一宏 氏〕

目黒川は武蔵野台地から流れる伏流水が東京湾に注ぐ、延長8kmの二級河川。ほとんどが下水道処理水で、豪雨により急激に水が増える川。昔は舟運で利用されていた。

地元商店街が昔の街並みを復活させるまちづくり活動を行う中で、河川にも目を向け、子どもたちが遊べる川にしようと、目黒川およぎ隊をつくって活動している。2012年11月から目黒区、世田谷区と協力して、地域の商店会長、自治会長と一緒に目黒川流域交流会を設立。Eボート体験、生き物調査、清掃活動、近隣の学校での総合学習、防災訓練などを行っている。祭りが多い地域で、大きなもので12回。それに合わせて年に6回ほどEボート体験会を行っている。目黒川で泳ぐデモンストレーションも行っている。学校と連携した防災教育では、高校生が自分たちでハザードマップを作ることもしている。楽天やJTBなど、企業とも連携したまちづくりの取り組みに発展しつつある。

資金面や、人材育成など課題もある。他地域の事例も学びながらこれからの活動に取り組んでいきたい。

交流会 18:00～

【会 場】グランドール四季亭 見附市新町2丁目7-10



乾杯！



会場を盛り上げる越後見附太鼓



豪華賞品争奪ジャンケン大会



勝者はおれたちだ！



参加者全員で記念撮影。明日の活動も頑張りましょう！

2日目 10月13日(日) 午前 会場:見附市文化ホールアルカディア 小ホール

分科会 9:00~10:20 ※(各分科会の詳細については、32ページ 議事録参照)

【第一分科会】

- テーマ 『防災教育』
- コーディネーター:金沢 緑 氏 (NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会)
- 話題提供者:相馬 孝 氏 (小川原湖自然楽校)

【第二分科会】

- テーマ 『防災と地域コミュニティ』
- コーディネーター:名和 あけみ 氏 (NPO法人 長良川環境レンジャー協会)
- 話題提供者:二見 拓也 氏 (NPO法人 鶴見川流域ネットワーキング)

【第三分科会】

- テーマ 『川と広域観光』
- コーディネーター:大内 雅司 氏 (岩尾内ダム水源地域ビジョン推進会議ASOVI)
- 話題提供者:柴田 勉 氏 (TERRA子野アドベンチャー)

【第四分科会】

- テーマ 『NPO活動と防災』
- コーディネーター:土井 裕子 氏 (NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク)
- 話題提供者:宮尾 博一 氏 (NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会)

分科会報告 10:30~11:10



コーディネーター
NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会
総務副部長 田中 謙次 氏



○第1分科会 金沢 緑 氏・相馬 孝 氏

○テーマ 『防災教育』

防災教育について議論した。行政、地域団体、学校それぞれができることを整理。

防災教育は、一人ひとりが防災に対する問題を内部化していくことが必要。学校をはじめとする組織においても内部化していくことが必要。

しかし、学校の中に入っていくには教育カリキュラムの問題があり、現在数えられるだけでも34以上あり、防災教育が入っていくのは難しい。義務教育の中に防災教育を取り込み、全児童が機会を享受できるようにするための方策について検討を行った。

まず、正面突破として、学校の先生にRACリーダーになっていただく道をひらくための資格を取る際の要件緩和を図ること。また地域の方々の了解を得て、地域推進本部を設置。地域の川の安全対策として学校での防災教育に取り組んでいくこと。そのために、モデル自治体づくりを進める必要もある。

これから議論すべきテーマもいくつか出てきたので、今後ワーキンググループ等を作り検討を進めたい。

○第2分科会 名和 あけみ 氏・屋田 しょうた 氏

○テーマ 『防災と地域コミュニティ』

RACとして何をすべきか。自分たちの取り組みから3つの課題が整理された。

- ① 災害の経験から学んだことをどう生かすか。
- ② 地域防災と地域、企業とのかかわり
- ③ 市民防災活動

この課題に沿って、さらに3つのグループに分かれ議論を進めた。

大切なのは、知識と日常のつながり。災害時に地域コミュニティが力を発揮するためには、日頃から行政、そして地域の方々にRACのことを知ってもらう必要がある。RACが地域住民と行政の間に入って役割を果たす。連携して地域防災力の向上につなげていくことが必要。

○第3分科会 大内 雅司 氏・生田 モエ 氏

○テーマ 『川と広域観光』

まず、先進事例として、南阿蘇のTERRA子野アドベンチャーの体験観光について話題提供いただいた。加えて、日本でどの程度カヤックが売れているのか、商業ベースでどのくらいものが売れているのか、観光人口がどのくらい戻ってきているのかについて情報提供いただき、意見交換を行った。

集まる人の年齢層がバラバラで、若年層と年配者で川の楽しみ方が違う。地域によってニーズが異なる。都市型の川は入ることに躊躇する人もいるので、川との関わり方が異なる。NPO、ボランティア、商業ベースの企業でも関わり方が異なってくる。観光という一つのまとまった答えを出すのは難しい。

川の駅をベースとして、まず地域の人が遊ぶ機会をつくり、まず盛り上がることで発展につながるのではないか。そして、リピーターがもう一度来たいと思う遊びの提供が必要だというまとめとなった。

○第4分科会 土井 裕子 氏・宮下 翠 氏

○テーマ 『NPO活動と防災』

まずはじめに、防災船着場の社会実験について話題提供をしていただいた。

東京都の河川には防災船着き場があるが、現状、実際には使うことができない。使えなければ防災の機能を果たしていないことと同じである。行政等からは市民団体については信用されていない傾向が全国的にみられる。そこで、信頼できる団体、川の指導者、河川教育団体などとしてRACをアピールし、社会的に認知されることが必要である。災害時に陸路が寸断されても、水路は使えることがあるので、RAC指導者が川を使って活躍できる。そのために質の高い指導者の育成を目指す。

「RAC主導のRAC防災国家」を作り上げていくべきである。

○質疑応答



Q. 学校の先生がRACリーダーとなるために資格要件の緩和が話題に上っていたが、それについてご意見を伺いたい。

- A. 現場の先生にその話をすると、「無理でしょう」と言われる。3日連続は確かに無理だが、21時間という所要時間は変えられないとしても、3日連続ではなく、積み上げ式でできるようにするという方法はある。
- A. 3日連続は難しいが、2週に分割すれば可能だと思う。RACの理念、活動内容には興味を感じるので機会があれば受講したい。資格を取った後、それをどのように生かすかが明確であれば、さらに受講動機ができる。
- A. 資格の活用について、分科会での議論では、図書館司書のように学校への配置が定められている、防災教育主任としての付与資格を作るという案が出た。

Q. 広域観光においてNPOやボランティアに対し、商業ベースでの観光は取り組みが異なる面がある。互いにつぶし合うのではなく、共に発展する方法は何かないか。

- A. 防災船着場の議論では、大町市の廃校を利用したホテルの話が出た。上流にあるその施設を通常は観光用の施設に使用し、災害時は下流の人の避難先など防災に活用できるということを社会の仕組みとして導入して、できればよい。2020年の東京オリンピックに来た人が日本中の川を楽しんで帰る仕組みを作りたい。

Q. RACが市民団体に信用される団体となるために、行政サイドから意見はないか。

- A. 契約関係でNPOへの支援をする方法がないか考えていた。行政としては公平性を保つことが必要なので、なぜこの団体に支援するのかということを説明できる、その団体の位置づけを明確にする仕組みがあればと思う。
- A. 防災ということは国民一人ひとりの心に潜在的にある。それを顕在化させるのが行政の仕事である。個人がやること、行政がやること、その間を埋める人が必要。その間をつなぐ人、団体を評価していくのも行政の仕事であるとする。

○コーディネーター

本日の分科会で久住市長から、防災キャンプがパッケージ化されて周辺市町村でも取り組むことになったというご報告をいただいた。こういうこともRACがこれから取り組んでいくことの一つ。

防災というと「自助、共助、公助」と言われるが、それに「RAC助」を加え、川の防災への取り組みにまい進していきたい。商業観光と東京オリンピックも含め、RACの明るい未来に向けて進んで行きましょう。

全体会（閉会式）

11:15～11:30



全国大会の次回開催地である宮崎県延岡市へフラッグが
引き継がれました



NPO法人川に学ぶ体験活動協議会副代表理事
藤芳素生氏による三本締め

みなさん、また来年お会いしましょう！

2日目 10月13日(日) 午後

日本一の大河・信濃川川下り 13:15~16:30 (参加者 77名)

【出 発 地】信濃川右岸 妙見堰下流河川敷
【休憩地点】越路橋上流中州、長生橋上流中州
【到 着 地】信濃川右岸 大手大橋下流河川敷

フォトギャラリー



午前までの雨が上がり、見事な青空が広がりました。
まずはオリエンテーション開始



子どもたちもきちんとライフジャケットを着けて、準備万端



Eボートに乗る前に、RACリーダーからパドルの使い方の
説明を受ける参加者。真剣です



準備OK! 出発前の記念撮影



行ってらっしゃい!



次々にスタート! 楽しい川旅の始まりです



各艇、順調な滑り出しです



日本一の大河、信濃川を最高のコンディションで下ります。
気持ちいいー！



越路橋の手前にある中州に上陸して一休み



橋の上にいるカメラマンに、みんなでオールを上げて挨拶。
ヤッホー！



船上での様子。みんな楽しそうです



ゴール地点から。船影が見えてきました



ゴール! お疲れ様でした!!
「あ〜、楽しかったー」という声があちこちから



ボートを担いで岸から上がる皆さん、笑顔がはじけます



参加者が協力して、ボートを水で流し、拭いてきれいにします。
みんなでやれば作業も早いです



長生橋の上流側の中州にて、全員集合の記念写真。
みなさん、最高の笑顔です。また、川で会いましょう!

3日目 10月14日(月・祝)

エクスカーション 9:00～13:20 (参加者 23名)

【集 合】見附市文化ホール アルカディア前

【視 察】長岡市山古志地域の中越地震からの復興状況視察

- ・長岡市役所山古志支所でのオリエンテーション
- ・被災集落、水没集落視察
- ・中山隧道

見附市 刈谷田川防災公園・道の駅「パティオにいがた」視察



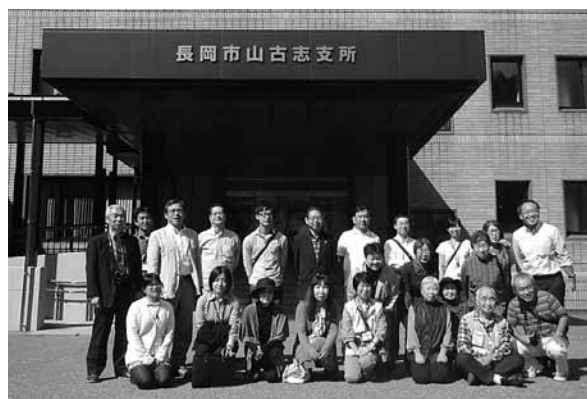
地元ガイドによる中越大震災当時の状況説明



中越大震災の土砂崩れでできたせき止め湖により
水没した木籠(こごも)集落



手掘り隧道では日本一長い中山隧道を見学



長岡市山古志支所前での記念撮影



広々とした芝生広場の道の駅パティオにいがたにて



道の駅「パティオにいがた」内にある『防災アーカイブ』。
市長自ら解説する様子



「地球を歩いてみたこと、聞いたこと、考えたこと」

探検家・医師・武蔵野美術大学教授 関野 吉晴 氏



【講師プロフィール】

一橋大学在学中に探検部を創設、アマゾン全域踏査隊長としてアマゾン川全域を下る。その後医師となり、南米への旅を重ねる。1993年から2002年にかけて、アフリカで誕生した人類がユーラシア大陸を通過してアメリカ大陸に拡散した道を、南米最南端から逆ルートでたどる「グレートジャーニー」に挑んだ。2004年からは「新グレートジャーニー 日本列島にやって来た人々」をスタート。シベリアから稚内までの「北方ルート」、ヒマラヤからインドシナを経由して朝鮮半島から対馬までの「中央ルート」、インドネシア・スラウェシ島から石垣島までの「海のルート」を踏破。著書、写真集多数。1999年植村直己冒険賞受賞。

20代の時アマゾンに行き、20年南米に通ってから、グレートジャーニーという旅を始めた。その後新グレートジャーニーと題し、人類が日本列島にやってきた足跡をたどった。

本日は南米通いの次のグレートジャーニーについてお話する。

グレートジャーニーとは。

人類はアフリカで生まれた。大体6万年前にホモサピエンスが誕生。現在は70億人住んでいる全員がホモサピエンス。一番古い猿人は700万年前に誕生。アフリカを出ずに滅びる。その後生まれた原人は、180万年前にアフリカを出てアジアにも来たが滅びる。その後、20万年前に現在いる全人類の先祖がアフリカで生まれ、6万年前にアフリカを出て、一番遠くまで行った人たちはアラスカシベリア経由で南米最南端に出た。その一番遠いルートをイギリス人の考古学者が「グレートジャーニー」と命名。それを逆ルートでたどる旅をした。

なぜ逆ルートなのか。

南米に通っていた頃、主に付き合ったのは、アンデス、アマゾン等の南米に住む先住民たち。特にアマゾンの人は日本人と似ている。顔、背格好、しぐさ、シャイな性格。アジアやシベリアからやってきた人たちだから似ているのは当然だが、この人たちがいつ、なぜ南米に来たのか知りたい。そのために逆ルートをたどる旅とした。なるべく当時の旅を再現するため、自主ルールを決めた。全行程家族を連れて採取狩猟しながらの旅をしたかったが、子どもは小さく、採集狩猟をすると各地で何度も警察に捕まってしまうので無理。彼らに近いかたちで、自分の脚力、腕力を使い、近代的動力を使わずに行く。馬やラクダなど昔使われていた動物、ソリを使っても乗るのではなく引っ張ってもらうのであればOKというルールを作り、それを最後まで守り抜いた。

パタゴニアから出発してアラスカ、シベリア、アフリカに向かう旅について写真を見ながらお話ししたい。

途中アマゾン川、メコン川などたくさんの川に出会う。川について重点的に話す。

これはパタゴニアの海。風が強く荒れる。待つことが多い。350キロくらいしかないのに、10日ぐらいでいけるかと思ったら1か月かかった。そのうちの半分は波待ちで待機。

南米大陸より南にマゼラン海峡を挟んでフエゴ島がある。人類はさらにビーグル水道を渡ってナバリノ島という島まで進出していた。そこから出発。

ビーグル水道の途中で海が時化て上陸。しかし失敗する。シーカヤックの特徴はどこでも上陸できることだが、岩にたたきつけられて先端が割れた。旅の最初から難関にあたる。

フエゴ島にたくさんあるフィヨルドに入っていくと、最高峰のダーウィン山脈がある。そこにミナミゾウアザラシなどがいる。風が強い。北西の風が同じ向きに吹き続けるので、木もその向きで傾くすごい風。

これはフィッツロイという山の写真。フィッツロイというのはイギリス人がつけた。有名なビーグル号の船

長の名前。土地の人はチャルテンと名付けていた。煙が吹く山という、山の性質が解る名前。アルゼンチン側にはパンパス、乾燥地帯。チリ側にはフィヨルド、その間に南米でも一番大きな氷床がある。そこに海から偏西風で湿った風が流れ込み、山にぶつかって上昇気流が発生するためいつも上空に雲がわいている。煙が立ちのぼる山とせっき土地の人が命名しても、外国人がフィッツロイと勝手に名前をつけてしまうのがアルゼンチンやチリ。

ペルーやボリビアでは昔ながらの名前がついている。

たとえばアルパマヨというアンデスで最も美しいと言われる山があるが、アルパマヨは赤い川という意味。赤茶けた山でそのために水が赤いのだろうと意味がわかる。他国人の名前を勝手につけたりはしない。

写真は朝焼けのレンズ雲。風が強烈に吹いていることを表している。この後には、必ず嵐が来る。

この南部氷床という、2百数十kmある氷河のもとになる所を横断した。1960年にシプトンという探検家が北から南に縦断したことがあるが、対して我々はナバリノ島からフエゴ島を渡って北米に向かうために北上する。北西の風が強烈に吹いている中、逆風をついて渡らなくてはならないが、そんなことは誰もやったことがない。

そこでソリを引っ張って、スキーを履いて行くが、それができたのはかなり北の方へ行ってから。特に怖いのはブリザード。最初のうちはソリなんかとても引っ張れない。

180キロ（風速50m/s）の風が吹く。テントは下から押さえないと潰れてしまう。雪がどんどん積みあがってテントが埋もれるため外で雪かきも必要。風で張り綱が切れる。足元はクレバスだらけ。それを避けながら進むような状況。スキーは履けない。

日本人4人、ペルー人2人で横断。場合によっては3人で1つのソリを使い、順に人を渡し、穴を掘って雪でブロックを作り、スキーを立てて風をよけて進んで行く。

人力で進むため、舗装道路があるところでは自転車と距離を稼いだ。

南米では治安が良くないのであまりテントは張らない。人がいないところではテントを使用。

この写真はアマゾン川の源流。アンデス山脈に水源をたどると、アンデスの氷河の一滴が最初の水源となる。そこにインカの末裔が、高地でアルパカやリャマなどを飼って住んでいる。すごいのは標高差を利用するところ。高いところで標高4000～4500mで家畜を飼い、3000m～4000mでじゃがいもを栽培、2000m～3000mでとうもろこしを栽培。それを同じ人がやっている。インカの時代から同じやり方で、だから彼らは生きていった。子どもは子ども社会がある。小さい子はお兄ちゃんお姉ちゃんが面倒を見て、そのため大人は仕事に精を出すことができる。

標高3800mくらいのチチカカ湖をカヤックで抜ける。きれいな色だが、それは生活用水が流れ込み、栄養の富んだ水になってアオコのような藻が発生しているから。なおかつ、ほとんどの湖や川で水位が低くなっている。チチカカ湖はこの30年で1メートル以上水位が減っている。

これはマチュピチュ。そこから直線距離で100キロいくと、いわゆるアマゾン。

私が一番長く通っているのはペルーのアマゾン。ここに40年お付き合いしている家族がいる。1976年の写真が2回目に行ったとき。この時お母さんにおんぶされている子が3歳か4歳。この子が去年訪れた時は40歳になっていた。

彼らの生き方の基本は、自然から素材を取ってきて、すべて自分たちで作るということ。例外は刃物。逆にとナイフさえあれば、10歳以上にもなれば、1人で放り出されても生きていける。家も作れるし、樹皮繊維で衣服も作る。弓矢を作って魚や動物を捕る。

こちらはオオギワシという南米最強のワシ。サル为天敵で、サルがおそれて木から落ちてしまうほど強い。このワシの羽を矢羽に使う。その弓矢でイノシシを取る。バルサ材（森でいちばん柔らかい木）とヤシの木（森でいちばん堅い木）と釘で筏を作る。木を切って筏完成まで3時間くらいで作ってしまう。

次はギアナ高地。エンジェルフォールの写真。

これが南米の三大河川、ラプラタ川、アマゾン川、オリノコ川のうちの一つ、オリノコ川になる。このオリノコ川は、アマゾン川と分水嶺なしでくっついている。これは信濃川と利根川が分水嶺なしでくっついているようなものであり、世界でここだけ。なぜかという、オリノコ川の水源から水が流れる途中で分岐があり、その3分の2の流れが北に向かってオリノコ川となり大西洋にいく。残りの3分の1が南に向かってネグロ川を経てアマゾン川の本流となり、大西洋に流れる。1つの川が分岐してできているから、そういうことが起こる。ギアナ高地は、コナン・ドイルの小説「ロストワールド」の舞台になった山。ものすごい岩盤で移動がしづらかった。

次にコロンビアとパナマの国境地帯。全行程の中で一番恐ろしかったところで、ため息ばかりついていた。麻薬組織、密輸組織、反政府ゲリラとそれに対抗する農園主、牧場主が雇う民兵、政府軍が入り乱れる非常に危険なエリア。中でも一番怖かったのが反政府ゲリラ。反政府ゲリラの資金源が誘拐ビジネス。ここを通る時に誘拐されて身代金を要求される。当時身代金の額が1人1億。今はもっと高くなっている。4名で移動するから捕まれば身代金が4億。捕まった場合、5つ星ホテルに連れて行かれ、丁寧に扱ってくれる。その間に金の支払い主と交渉する。しかし、金が払えなければ確実に殺される。シーカヤックや登山ならトレーニングすれば技術や体力がついてなんとかなるが、治安の悪さはどうにもならない。最後は運に頼るしかない。

しかし、安全対策を取らないわけにいかない。行程の途中を飛行機でスキップすることはしたくないが、様子を見てみると、通常より悪い状態。本来ならパナマ側もコロンビア側も国立公園で世界遺産。治安が悪くなければツーリストが世界中からたくさん来るはずの場所。なのに本来待機しているはずのレンジャーすらない。レンジャーも怖がるほど危ない状態だった。

しかし、話を聞くと、3か月待てばレンジャーがまた入るといふ。そこでレンジャーと一緒にいくことにした。

こういうところをうまく通るコツは、目立たず、ひっそりと、迅速に進むこと。だがこの場合は、川をのぼって、山を越え、分水嶺を越えなければならない。早くは進めない上に、地元の人が使わないシーカヤックを使う日本人が目立つ。1日で地域に知れ渡る。

また、分水嶺を越える時は折り畳み式のカヤック、食糧、撮影機材を運ぶので、かなりの荷物となる。ポーターを雇うのだが、そのポーターがゲリラのシンパや、麻薬の運び屋かもしれない。いつポーターが賊に変わるかもしれない。そして移動が長くなると、ポーターが不平を言い出す。重すぎる、足が痛い、ギャラを上げないと置いて行くぞ、など。治安が悪い上にそうした心配、嫌がらせもあり、川では現地の人の船が通るたびにヒヤっとしながら、無事に反対側へ到着した時は本当にホッとした。

コロンビアとパナマ国境まで来ると、少し安全だと言われているが、この少し後、ドイツ人2名がゲリラに捕まる。連れて行かれる途中、政府軍と遭遇して銃撃戦の巻き添えになり、2名とも亡くなってしまった。

これは近くのクナという先住民の村。その村までいけば安全だと言われている。写真のトカゲは今晚のおかず。

ここからはアラスカ。

アラスカのザトウクジラ。南東アラスカは自然が豊か。ブラックベアは夏の終わりに鮭をたくさん食べて栄養をつけて眠りにつく。ハクトウワシ（アメリカの国鳥）。見た目はカッコいいが死肉漁りで、死んだ鮭を食べる。

鮭のあるところはとても豊か。1度に1年分の食糧が取れしまう。それを干したり燻製にする。写真はキングサーモンをさばいているところ。そしてザトウクジラ。

新大陸と旧大陸の間に、一つの難関、ベーリング海峡がある。ここを冬の凍った時に歩いて渡ろうとした。昔はずっと凍っていたが、今は温暖化で凍らない時期がある。アラスカ側から見ている写真の、手前の島がアメリカ領のリトルダイオミード島。距離が6〜8キロしかない。向こう側はロシア領のビッグダイオミード島。

米ソ冷戦時代から、ソ連とアメリカの一番近いところは10kmもない。一番奥に見えるのがユーラシア大陸の東端。歩いて行こうとしたが無理。諦めて次に、現地の人を使うウミヤックというセイウチやアザラシの皮で作ったボートに帆を使って行こうとしたが、風がうまくいかずに何度か失敗。最終的にはシーカヤックで渡る。

ずっと海が荒れ続けて8月になっても渡れず待っていた。もうだめかなと思った時、嘘のように無風快晴の日が訪れた。そんな日は年に1度か2度しかない。

最初に手前の島、アメリカ領のリトルダイオミード島に行つて一泊しようと思っていたが、いい天気は続かない。水面が鏡のようになる無風快晴の日の後は必ず嵐が来る。そこで泊まらずに4時間ほど休んだだけでユーラシアに向かった。24時間漕ぎっぱなしでユーラシアに到着したら、案の定その後すぐに嵐が来た。泊まらずに行つてよかった。

写真はその後使用したシースケープ2というシーカヤック。そして鏡のようになったベーリング海峡。

ユーラシア側へ渡ったらトナカイぞりで行こうと思っていた。トナカイは、ソ連時代には国のものだった。届を出して長い距離のキャラバンをした。しかし今は個人のもの。長距離移動すると他人のテリトリーに入ってしまうので長距離の移動ができない。そこでほとんどを犬ぞりで移動。犬ぞりの特徴は、釘を使わず、すべてロープを使っているため、しなやかで遊びがあること。壊れたら紐を結び直せばよいので簡単に直せる。釘を使うとパカッと割れて直しにくい。

犬の面倒臭いところはエサをやらなくてはならないこと。アラスカ側でも犬ぞりを使ったが、250kmのうち半分はドッグフードを使った。アラスカではエスキモーなどの先住民はもう犬ぞりを使っていない。スノーモービルが普通。犬ぞりを使うとしたらレースやツーリングなどのスポーツの時。しかしロシアへ行くと全然違う。家畜として、移動や荷物運搬などに使う。扱いも異なり、アラスカではペットとして可愛がるが、シベリアでは家畜として扱う。エサもロシアではドッグフードではなく、アザラシやセイウチの肉、干し魚。

犬ぞりの旅を3回して、最後の1回は私1人で旅をした。

犬ぞりとトナカイぞりは歴史が違う。犬ぞりが先。南の方から来た人たちが、もともとその土地に生息しているトナカイを狩りの対象にしていた。それを飼ひ馴らすことに成功した。馬に乗るように、トナカイにも乗れるんじゃないかと乗ってみたら、乗れた。そして飼うようになったら、近くに犬ぞり文化があった。じゃあトナカイにもそりが引けるんじゃないかと、そんな流れでトナカイぞりが始まった。

乗っている姿は同じでも、犬とトナカイではその運転の仕方が全く異なる。犬の方が賢く、右、左、進め、停まれの4つの言葉が解る。言葉で操縦できる。

しかしトナカイはそれほど賢くない。馬と同じで、手綱を付けて操縦する。右に進むときは右の手綱を引く。進むときは尻を叩く。

乗る時の気分は、トナカイの方が気持ちよい。サンタクロースになった気分。

2頭立てで、鞭をたたく。2頭のうち右側のトナカイに指令を出すと、左のトナカイもそれに従って動く。トナカイの目は顔の側面についており、後ろも見えている。そのため賢いトナカイは、鞭で叩いて進ませるとそれを見ていて、次の時は鞭を叩く真似をするだけで同じように前に進む。賢くないトナカイは一回叩いても、次も叩く真似をするだけでは動かないので毎回叩かれる。トナカイぞりをする時は、右側のお尻を見ると性格がわかる。頭の悪いトナカイはいつも叩かれているからお尻の毛がない。賢いトナカイはお尻がきれい。トナカイの遊牧民とそりで旅をすると、いつも私には毛並のよいおとなしいトナカイをつけてくれる。

南米からアラスカ、シベリア、アフリカまでは、40いくつかのミニエクスペディションのつながりとした。

パタゴニアの海350kmをカヤックで渡るとか、南部氷床200数十kmを歩いて渡るとか、そうしたミニエクスペディションが40数個つながって、グレートジャーニーを構成している。それぞれのミニゴールに着くと、困難なほど達成感が大きくて気持ちよいが、それぞれの旅の途中ではゴールに着けるかどうかかわからない。例えば犬ぞりの旅では、雪が少ないと岩が露出してそりが壊れる。雪が多くなると沈んでしまう。最後の方では不安になり、到着すると本当にほっとする。常に早く着きたいと思って旅していたが、2ヵ所だけこのまま旅を続

けたいと思った。

一つがトナカイぞり。もう一つはゴールに近いタンザニアのンゴロンゴロ自然保護区。野生動物の楽園。国立公園なのでレンジャーがいて、本来は車でしか入れない、車から降りてはいけないエリア。しかし南米からタンザニアまで足かけ10年かけて旅してきたことをタンザニア政府が認めてくれて、自転車で走ってもよいという許可をくれた。後方からレンジャーが見張る中で、ヌーやキリンやガゼルなどいろいろな動物がいる中を縫って自転車で旅をした。動物たちも初めて見る自転車にびっくりしている。最初は離れるが、しばらくたつとまた少しずつ近づいてくる。そこではこのままずっと走っていたい気持ちになった。

トナカイ遊牧民は家財道具を全部積んで移動する。テントには薪ストーブがついている。煙突の出口は鉄板でおおってあるからテントは温かい。外はマイナス40℃でも中は0℃くらい。

冬ばかりシベリアを歩いていてもつまらないので、夏にも馬に荷物を積んで歩いてみたが、これはやるべきではなかった。湿地帯なので馬が沈んでしまう。いちいち荷物を外して、人間が荷物を運び、馬だけ渡してやったり、落葉松の枝を切って橋を作ってみたり、いろいろと工夫してみたが、1日10数キロしか移動できない。余計に時間がかかった。

川に出てからは、この大会でも明日信濃川で使うような、インフレーターブルのアドベンチャーというカヌーを使った。しかし途中で、土地の人が使うカヌーが、ベーリング海峡を渡ったカヤックと長さ、幅、高さが同じだとわかった。名前もカユック。カヤックの語源ではないらしいが、その土地のもので渡るのがいちばんだと、最初のカヌーは畳んでしまい、このカユックで川の最後は下った。

これはゴビ砂漠。ラクダで1か月かけてモンゴルのゴビ砂漠を横断した。

ラクダは馬よりも強い。大きいので怖い、1か月くらい食べなくても大丈夫。すごいのは水を1週間くらい飲まなくても大丈夫なこと。それでいて200kgくらいの荷物を積むことができる。何でも食べてしまうすごい動物。ただ川を渡るのは怖がっていた。

砂嵐の時は、視界がなくなるような強烈な圧力がある。ラクダの陰に隠れてやりすごす。そういう時にラクダを観察すると、まつ毛がとてもながい。耳、鼻毛もびっしり。砂対策ができて、頼りになる動物。

ただ機嫌が悪い時に近づくと蹴飛ばされる。自分はラクダに乗り、荷物を乗せたラクダを引っ張るのだが、一度乗っているラクダから落っこちてしまった。落としたラクダがびっくりして前足で私を踏んだ。骨折したかと思ったが、打撲で済んだ。ちょっと乱暴な時がある。

その点、アフリカのひとこぶラクダは大人しい。しかし力強さではふたこぶラクダにはかなわない。土地の人は引っ越しの時、ゲルという簡易テントをラクダに積んで移動する。年に4回の引っ越しを軽々で行う。

これはヒマラヤ、ネパールのドルポ。一番遅く開放された場所。ラサから中国、ネパールを越えてカトマンズに行く道路を走っているところ。標高5000m以上のところからカトマンズの1300mまで一気に下る。1時間ごとにどんどん湿気が強くなる。草しかないところからどんどん森があるところに入っていく。風景が大きく変化する移動。

ドルポの人は、農業では半年分しか食料が得られないので交易をする。中国が実効支配しているチベットまで塩を取りに行き、ネパールの南のヒンドゥー教圏でトウモロコシや米と交換する。

エジプトへ向かう時、ヨルダンからイスラエルを通ると舗装道路を歩いて1時間で行けるが、イスラエルでパスポートに入国スタンプを押されると、入れなくなる国がいくつかある。イスラム原理主義のイランやスーダンなど。このあとスーダンを通るため、スタンプを押されるのはまずい。そこでヨルダンから紅海を渡ってエジプトへ行くことにした。ところが風が強くてなかなかうまくいかない。3回目でようやく渡ることができた。

エジプトは道路があるが、スーダンの北部にはない。ナイル川は下る許可が出ない。そこで、スーダンの北部、ヌビア砂漠をひとこぶラクダで進むことにした。道はなく、途中、死んだラクダの骨があり、それが砂漠

の道標となる。ラクダ市でラクダを買う。1頭9万円くらい。

そうして旅を終え、アフリカに着いた。

しかしそれまで30数年間海外を旅して、自分の足元を知らないということを感じていた。

そこで日本列島にいつどうやって人がやってきたかをたどる旅をしたいと思った。やはりアフリカ発だがルートは山ほどある。いろいろなところから人がやってきて、混血してできたのが日本人。その中でも主要なルートはあるので、それを選んだ。

まず北方ルートのシベリア、サハリン、北海道。写真は宗谷海峡を渡っているところ。宗谷岬にある風力発電の風車。

アフリカにもどって、これはエチオピア。気温が60℃まで上がる、世界で最悪の砂漠と言われるダナキル砂漠。海拔マイナス150mくらいのところにある塩湖に塩をラクダで取りに行く。

こちらはゴールのラエトリ遺跡。3人の猿人の足跡化石がある。解釈としては、おそらくお父さんとお母さんと子供じゃないかと考えられる。しっかりと2本足で歩く、家族を作るという人間の特徴を表している、それが残っている遺跡。

シベリアからサハリンに渡るには間宮海峡を越える。ベーリング海峡は歩いて渡れなかったが、ここは凍っているので渡れる。しかしそれは海水が凍るのではなくて、アムール川によって海水が薄められているから凍る。夏にこの海の水をなめてみるとしょっぱいが、味が薄い。汗のよう。知床や網走に来る流水も、すべてアムール川の氷。

シベリアはオーロラがきれい。オーロラは、高緯度へ行くほどたくさん見えるのではなく、北緯70度くらいが一番よく見える。そのためアラスカのフェアバンクス、ノルウェーなどもよく見える。ふつうのオーロラは緑色から黄色が多いが、ここでは赤や紫が入って全天に見える。

間宮海峡を横断するとき、なるべく南の方まで歩いて行こうと思った。時々内陸に入ったり、凍った海峡を渡ったりしながら南下。途中、南樺太のチュレーニー島、オットセイが何万頭といるところに寄った。

メコン川の水源がある山。あとで調べたら未踏峰だった。写真がメコン川の水源。この川を紅海を渡ったのと同じボートで下った。

冬のメコン川。この写真の文字は砂で書かれたお経。

夏のメコン川の水源地帯。標高4500mくらい。馬が放たれている。

青海省を出て雲南省へ下る。ラオスからカンボジア、ベトナム、メコン川へ。ラオスでは材木を引くのに象を使う。

水源はどこかということ、科学的には河口から一番遠いところであり、先ほどの写真の山が水源なのだが、現地の人はここを水源だと言う。きれいな池がある場所で、高僧がそこを水源だと指し示せば、そこが民族的な水源となる。

メコン川を下った後、自転車で中国を北上して北朝鮮へ入り、北朝鮮で一番高い山、白頭山へ。ここを下る時は部分的にしか走らせてもらえなかった。

北朝鮮から韓国側へ、北朝鮮が国境を越えさせてくれた。北朝鮮側の国境にいる将校は、優秀で人間的にも魅力のある人が多い。おそらく東ヨーロッパなどへの留学経験があると思われる。テレビカメラが回っていても、質問をすれば、核でも拉致の問題でも何でも答えてくれる。

ここまではメコン川沿いに下ってきて、インドシナへ行って、中国、朝鮮半島の南方ルート。

最後は海のルート。

シーカヤックでも行けるが、グラスファイバーの船ではつまらない。自分たちで船を作ろうと思った。写真は
大木を切っているところ。太古の人たちと同じように、自然から取ってきた材料で道具を作るところから始め
ることにした。海岸で砂鉄を集め、炭を焼いてタタラ製鉄をして、刀鍛冶の人に手伝ってもらって道具を作っ
た。インドネシアに渡って大木を切って船を作り、帆もヤシの葉で作った。ペイントは隆起珊瑚を砕いて粉に
して、ココナッツヤシの油をまぜて突いて練り、漆喰を作って塗った。ロープは棕櫚の繊維。結ぶのは籐。船
は完璧に自然素材で作ったものができた。

この縄文号という船は全長6.8m。これで4700kmを航海した。港に入るたびに「ほんとにエンジンがつ
いてないのか」「ほんとにインドネシアから来たのか」と言われた。船はアウトリガーがついていて安定してい
る。

写真は九十九里で砂鉄集めをしているところ、ヤシと棕櫚の繊維を集めているところ、周囲6.3mの大
木。これを切って自分たちで船を作った。帆の材料となるヤシの葉。細くして、縦糸を張って横糸を入れて原
始機で布を織り、それを帆にした。

5kgの工具を作るために、120kgの砂鉄と300kgの炭を作った。300kgの炭を作るのに3トンの松が必要
だった。つまり鉄の歴史は森林伐採の歴史。

ガンジス川。クンブ・メーラという大祭では、普段は誰もいないところに500万人の人が集まる。サドゥとい
う行者もいる。川が汚れすぎて沐浴ができなくなったため、彼らによってストライキが起こった。理由は、生
活用水が流れ込むことと、水量が少なくなったこと。温暖化に伴い氷河の上の方が溶けて水が少なくなって
しまった。世界中の川で同じ現象が見られる。メコン川は河口のあたりで6m水位が下がった。国際河川の宿
命でもある。上流でダムを作ってしまうと下流はおしまい。上流が有利。

アムール川も同じ。ロシアを流れているが、水源は中国。そこで化学合成会社を作って薬品を流すため、魚
がホルマリン臭くなって、先住民が魚を売れなくなり、自分たちも食べられなくなった。チグリス・ユーフラテス
もトルコから流れる国際河川。下流のシリアやイラクはトルコと戦争をしたくない。川の上流で毒を流された
らおしまいだから。

ガンジス川では、行政が清掃を行い、大祭を実行できた。ガンジスで有名なのは火葬場があること。遺体
は焼いて骨をガンジス川に流して自然に返す。

(質疑応答)

Q. 病気・ケガはどうしていたか。

A. 自分自身が医者なので、自分で治療するしかないのだが、病気にはたくさんかかった。特に熱帯で多い。マ
ラリアやデング熱、アマゾンでは2回に1回は寄生虫が入る。現地で同じものを食べれば入ってくるのは当た
り前。それは仕方がないので、日本へ帰ったら治す。マラリアの時は、同時に肺吸虫とアメリカ鉤虫(十二指
腸虫)の3種類が入り、寄生虫学教室や内科の教授たちが喜んで、医学生だった自分は症例として奪い合い
になった。症状が辛いマラリアから治そうと治療していたら、肺吸虫とアメリカ鉤虫も消えて、それが学会発
表された。

何度も「骨が折れた」と思ったことがある。ラクダに思いつき大腿骨を前蹴りされたり、トナカイぞりに
乗っている時、岩場を下るそりの下に足を挟んでしまったりして、骨が折れたと思ったが、実際には折れていな
かった。山スキーをしている時、出っぱっている木の根っこに左足が引っかかって自分が飛んでしまった。後
ろを見ると左足の靴が残っていて「ああ、足がもげちゃった」と思ったが、自分の足を見ると靴が脱げただけ
だったなどということもある。

治らない寄生虫もある。デング熱もウィルスなので治らない。薬がないからじっとしているしかない。面白
かったのはアンデス越えの際。アルゼンチンからチリへ山越えをする途中、10日くらい誰にも会わず、標高
4800mくらいの山を越えている時、途中で顎が腫れてきて痛くなった。水も飲みにくい。そうしたらおたふく
だった(笑)。40過ぎなのにその直前には風疹もやった。日本人は、30くらいまでには大体の人がA型肝炎の

抗体を持っている。てっきり自分もそうだと思ったら違った。いかに小さい頃、衛生的に大事に育てられたのかと思った。

基本的には自分を診るよりは他人を診る方が多い。もともと開業医や勤務医になるつもりで医者になったわけではなく、医者のいないところで医療をしたいがために医者になったので、その準備をして旅をしている。人を治す準備をしているから自分も治せる。

自分は40いくつかのミニエクスペディションをつなげて全部成功させたからアフリカのゴールに到着したわけだが、それを他人が見ると、私は「失敗しない人」だということになる。しかし実際はそうではない。成功までには100から200の失敗をしている。それでなぜ成功したかと言えば、成功するまでやり続けるから。失敗の積み重ねで成功がある。いろんなことをやっているとと思うのは、成功ばかりしている人間は成長しないし、面白くない。失敗ばかりしていじける人もいるが、いじけずに失敗を重ねながら成功してきた人のほうが、魅力ある人が多いと考えている。

パネルディスカッション 議事録要旨

10月12日(土)14:50~15:40

「地域の防災力を高める ～今こそ川の指導者の出番だ!～」

【コーディネーター】

NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 理事 平山 康弘 氏

【パネリスト】

国土交通省水管理・国土保全局河川環境課長 渥美 雅裕 氏

NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 理事 佐藤 ともえ 氏

見附市立名木野小学校 校長 山口 玲子 氏

見附市長 久住 時男 氏

平山:今日は、この大会を開催しておりますRACの活動、今年、去年と見附市で行っている地域での防災活動から、地域防災について考えていきたいと思います。まずは見附市で取り組まれている防災活動について、久住市長からご紹介をお願いします。

久住:平成14年から市長を務めている。就任して1年半後の平成16年7月13日に大水害、そしてそのちょうど100日後の10月23日に中越大震災が起き、半年に2度の激甚災害を経験した。水害は覚悟もなく何の準備もないところに起きた。そんな状況は二度と経験したくないと思った。この2つの災害を契機に、今後起きるであろう災害に対して、やれることは何でもやっていこうと試行錯誤しながら取り組んでいる。そう考える中に子どもたちの防災教育も含まれている。

平成17年から始めた見附の防災訓練には、4万2千人の人口の市で1万人が参加する。

防災教育については学校に協力をいただいているが、本当の防災教育や子どもたちの生きる力を育むことにつながっているのだろうかという疑問も感じるところに、東日本大震災が起きた。

東日本大震災では防災教育として「釜石の奇跡」が注目された。しかし、それと同じ防災教育をシステムとして広げるには、同じような力量の指導者が必要。「釜石の奇跡」を導いた群馬大学の片田教授のような人が日本全国に1000人もいるかというとそうではない。

これまでの防災教育で3つの反省。①座学、避難訓練が中心だった。子どもたちにとっても面白みがなく、迫力がない。②地域との関連を考えてこなかったため、臨場感がない。③防災とは教育そのもの。見附の教育ビジョンで一番大きい理念は、ふるさと見附を愛する子供を育てて世に送るということ。ふるさとで先人が知恵や工夫、苦労を重ね、その蓄積の結果として今がある。そのバトンを受け継ぎ将来につなげる。そういう縦軸の教育が、子どもたちの生きる力や人間力につながる。そこに防災の観点が大きな要素になると考えた。

昨年は文科省から全国15か所が指定を受けて、見附でも防災教育を実施した。実施にあたっては5つの方針を整理した。

①体感的であること。身体で感じられるスキルと知識。子どもたちを学校の教室に泊らせ、ゴザの上に寝かせた。食事は非常食にして、実際の避難所の状況を体験させた。②子どもたちが今住んでいるこの場所で、この家族がいる現場で、災害がいつくるかわからないということを学ぶ。③ふるさとを大事に思ってもらう。この場所、この人たちの中で自分が育てられているんだと実感し、愛着がわくように。④学校だけではなく地域総がかりで、大きな関わりの中でプログラムを作っていく。⑤子どもの防災教育を地域総がかりで実施することで、大人も同じことを感じ、防災を考えるきっかけにしていく。

総がかりという中には、RAC、赤十字、遊水地を提供いただいた農家の皆さんの協議会、地域コミュニティ協議会、PTA、大学教授、消防本部、市の防災担当、教育委員会、文科省、県教育委員会等が関わり、実行委員会を作った。文科省の指定を受けた15か所の中で、見附が高い評価をいただいたと思っている。今年は昨年に続き、名木野小、今町小の2か所で1泊2日のキャンプを実施することになった。その経験を教育委員会が吸い上げて広がりにつなげ、見附中学校が自主的に防災キャンプを実施してくれた。そして防災キャンプに参加した中学生の半数が市の避難訓練に参加している。非常に良いインパクトを子どもたちの心の中にもたらしている。

この防災キャンプの取りまとめの中心はRACであった。学校の先生や地域の人々だけではできない。実際

の知識や経験を持った指導者が関わるのが大事。この防災キャンプも、子どもたちの対応等をRACが受け持ち、学校の先生はそれをバックアップした。現在全国に4000人くらいいるRAC指導者が活躍し、評価されることが必要。しかし今まで育ててきた指導者が、必要とされる現場はまだまだ少ない。しかしこの人材が防災教育に欠かせない、日本の宝になる。これをきっかけに全国の自治体が気づき始めるだろう。今日の参加者の皆さんが、各地域で見附の取り組みや防災キャンプに対する文部科学省の評価を伝えてほしい。RACという専門家の手助けを得られるならやってみようという学校、自治体も増える機会になればありがたい。

最後に、教育上良かったと思うのは、小学5年生を学校に泊めたこと。子どもを1人で外に泊めることに抵抗があったとしても、毎日通っている学校ならまだ了解しやすいのではないかと。親の子離れ、子の親離れにつながる取り組みでもあった。終了後の子どもたちを見ていてそう思った。

平山: 学校での防災キャンプについていろいろな考えがあったというお話をいただきました。防災キャンプで実際にご苦労されて、昨年は3日間学校に泊まり込んで子どもたちの様子をご覧になった、名木野小学校の山口校長先生からお話いただきます。

山口: 防災キャンプ、防災スクールの実際についてお話させていただく。当校は刈谷田川のすぐ南に位置し、平成16年7.13水害では床上70センチの浸水被害を受けた。帰宅できなかった子どもたち約140名と教職員が学校で一晩を過ごした。その当校を会場として、昨年度は文部科学省の委託事業である防災キャンプを実施し、5年生が2泊3日で学校に宿泊。今年度は総合学習の一環として、1泊2日の日程で防災スクールを実施し、5年生が宿泊した。

このキャンプ、スクールのテーマは大きく3つ。

- ① 水害について科学的な知識、理解を深める
- ② 自分と家族、友達の身を守る方法を身に付ける
- ③ 集団生活を通して人との絆を深める

一つ目、水害についての科学的な知識を深めるということについては、7.13水害の様子、避難体験の様子について、地域の方々からお話を伺った。また市のハザードマップを使い、同様の水害が起きたら自分の家がどの程度水に浸かるか、避難場所はどこか、実際にまちを歩いて確認。刈谷田川の水を田んぼに一時的に引き入れ、洪水を防ぐ施設である遊水地を見学。平成23年の豪雨では、この遊水地のおかげで洪水が起らなかったという話も聞いた。子どもたちは水害の恐ろしさと、水害を防ぐための先人の苦労や知恵を学び、敬服していた。水害についての理解を深めることが地域の人々の知恵と努力を知ることにつながり、子どもたちはふるさと見附への愛着、見附の人への誇りを感じてくれたと考えている。

二つ目のテーマの自分と家族、友人の身を守ることにについては、RACや消防本部の皆さんのご協力を得て、担架で人を運ぶ搬送体験、スローロープを使った人命救助体験を行った。Eボートに乗る体験、調理をせずに食べられる非常食を食べてみるなど、実際に災害が起こった時にどうすればいいかを身をもって体験した。

3つ目のテーマについて。子どもたちは非常食を食べる回数が増えるに従い、普段家で食べている食事のありがたさを実感することができた。すべての活動が集団生活であり、周りの人との関わりを考える必要がある。友達との連帯感、家族への感謝の想い、日常あたりまえの生活ができることへの感謝など、子どもたちがさまざまな思いを持ったことが感想などから把握できる。

防災キャンプ、スクールによって、保護者や地域の方々との絆が深まった。ご協力くださったたくさんの方々からは、今後も継続して参加協力したいという肯定的な評価もいただいている。

水害のように川が災いをもたらすという面だけではなく、川は恵みをもたらすということも大切にしたい。Eボートで中州まで行って川遊びをするという貴重な体験により、子どもたちは目を輝かせていた。RACの協力があってこそできたこと。川遊びを通して、自然の中で遊ぶ楽しさ、見附の自然の素晴らしさを実感できたように思う。

さまざまな方々のご協力があって実施できた防災キャンプ、防災スクールについて、改めてお礼を申し上げたい。大変ありがとうございました。

平山：防災キャンプでは私も川と一緒に遊び、水害のお話も聞いた。実はRACのメンバーも、なかなかこうした体験はできないでいる。ここで佐藤さんから、ご自分の団体のRACとしての活動のご紹介をお願いします。

佐藤：茨城県取手市にある小貝川という利根川の支流近くにある、ポニー牧場で牧場長をしている。ハーモニーセンターはRAC会員でもあり、12年前から牧場を運営している。小貝川は昔から暴れ川と言われ、多くの水害被害を出している。現在、国交省河川事務所、取手市、地域のNPOが協力し、小貝川の河川敷を有効利用しようということで、放牧場を作り、天気がいい日は我々の所有する馬を放牧している。堤防の上はサイクリングロードになっており、ウォーキングや馬との散歩を楽しんでいる。

この写真はつい2週間ほど前の台風の直後。小貝川周辺の風雨はさほど被害がなかったが、上流に降った大雨の影響で1日遅れて増水した。上流でゲリラ豪雨などがあるとすぐに浸水する地域。

子どもたちは学校で、小貝川はとにかく暴れ川で洪水が多いという歴史しか学ばない。それでは自分の住む地域の川について「怖い」イメージだけしかない、愛することができないと、地元育ちの先生から相談があった。昔から地域の生活を支えてきた川であることを学び、川はいろんな遊びができる楽しいところなんだということを子どもたちにわかってもらえるよう、活動している。

カヤックスクールなどを開催しながら、川に人を連れてくる活動をしている。

写真は牧場会員の子どもたちが、本物の馬と一緒に川に入って遊んでいるところ。高い脚立から川に飛び込んだり、遊びを通して川の楽しさをアピールしている。

ただ、このような写真をホームページにアップすると、「この写真に出ている場所はどこですか。今近くに来ているんですけど見当たらないんです」という電話をたくさんいただく。しかし、今年は栃木県の上流域にゲリラ豪雨がたくさんあった。雨が降れば、写真とは全く異なる、浸水した光景となる。取手市には降っていなくても、上流域で豪雨があれば小貝川が増水するのは我々にとって当たり前。しかし他の人にとってはそうではない。

そろそろ、川の楽しさを広めるだけではなく、川との本気のお付き合いを考えるとところに活動をシフトしていくべきではないかということが、今後の課題。

川遊びをする前に、子どもたちはRACの「子供の水辺安全講座」のカリキュラムを受講し、川でやっていいこと、やってはいけないこと、楽しく遊ぶための極意を学んでから体験をする。残念ながら保護者には、そういう知識がない。今後は保護者も含む地域の人々にも知識や体験を広げていきたい。

平山：以上の3名の方のお話を聞いて、渥美河川環境課長から、河川管理者としてのお立場から感想も含めてお話をいただけますか。

渥美：お話しいただいたような活動が今日可能になってきた背景には、先達のさまざまな努力があったと考える。私が34年間河川行政に携わる中で、行政と地域活動の関係を考えるきっかけになったことが2回あった。それを紹介したい。

1回目は、平成11年ごろ。RACが誕生する2年ほど前、全国の各地域で川の利活用に関するNPO活動が展開され始めた。全国のNPOの集まりが、たまたま岩手県の奥州市（当時水沢市）で開催されることになり、自分はその時ちょうど近くのダム建設現場の所長をしていて、地元NPOの人に勧められてその集会に参加した。

そこで、なぜダムなんか作るのか、河川環境を考えてくれという意見を言われたことを覚えている。その時、公共事業に対する正面からの評価をもらった。それで思ったのは、我々は川のプロを自認しているが、川を外から見ている。その時集まった人たちは川を内側から見ていた。

2回目は、東日本大震災の時。自分は宮城県の名取市に家族を置き、宮城県の土木部に出向していた。宮城県庁の8階で激震を経験。その後、これまで築いてきたものがこんなに簡単に崩れてしまうのかという現実を目の当たりにして仕事をした。その時、行政と地域活動の関係が少しわかった気がした。例えば避難所に多くの人がいて、皆さん苦労や我慢をしながらそこで過ごしている。行政はそれを外から見て、物資の補給などの物理的な支援はしたが、実際のケア、例えばお年寄りの心配事を聞いたり、温かい味噌汁を作っ

げるといったことは、地域で活動している団体や、全国から結集した多くの人だった。

住民の中に自分たちの役割を見つけてきちんとした活動をしている多くの人がいる。地域の中で活動する団体が、この社会を支える上で非常に重要だということを認識した。

先ほどの河川の話で暴れ川という話が出ていたが、川も好んで溢れているわけではない。川は常に母なる川だと考える。川は我々の重要なパートナー。川を通して、防災教育や子どもたちへのメッセージを送ることができる良いフィールドである。

行政がこうした活動を成熟させていくために果たすべき役割を考えると、以前は行政が前に出て活動していた。今はRACなどと協調する時代。もう少したてば、RACが先に進み、我々はそれをバックネットとして支える、そんな時代になると考える。我々はそれができるよう努力していくとともに、RACから行政への刺激をいただくよう期待する。

平山：川で遊ぶことは楽しいですが、一方で水難事故の危険もあります。RACの活動の始まりは「川に学ぶ体験活動」。まずは遊ぶところから。でも自然だから、水ってこわいよということをしっかり身に付けておけば、川でも遊べる。それで講習会を開き、指導者を育成して、活動を広めることを続けてきたら、災害でも役に立ちました。

次は山口先生に、RACのメンバーがどんなところに役立ったかをご紹介します。

山口：昨年の防災キャンプ、今年の防災スクールとも、RACの指導者が来て、ずっと子どもたちと一緒に寝泊りして支えていただいた。

良かったこととしては、川の災害に対して、どうしたらいいかを具体的に教えていただいたことが一つ。例えば、スローロープで溺れた人の救助の仕方、着衣泳でのライフジャケットの付け方、泳ぎ方、Eボートで川を実際に上ったりの体験など、いざという時にどうしたら自分の身を守れるかを具体的に1対1で教えていただいた。そして、生活面でも子どもたちと一緒に過ごしながら、人と人との関わりがとても大事で、心がつながる、人への思いやりや感謝の気持ちを教えていただいたと考えている。

平山：RACの紹介したい活動、今後についてなど、佐藤さんをお願いします。

佐藤：RACの指導者は川で泳ぐだけではなく、子どもたちと一緒に川に入って、水生昆虫や魚とりをする大人がたくさんいる。それは決して趣味ではなく、きちんとした技術を持った上でやっていること。学校関係者や保護者から信頼を得て、活動を広げていければ、よりよい子どもたちが育っていくのではないかと考える。

平山：久住市長、RACに対してもっと頑張ってもらいたいことなどがありましたらお願いします。

久住：自然体験活動に市長就任前から取り組んでいる。日本の子どもたちの生きる力を育みたい。アメリカのサマーキャンプがきっかけになった。アメリカでも教育の問題があり、親が子供の生きる力を育めないため、夏は全米で3000くらいのキャンプが開催されている。幌馬車に乗せたり、川に行って自分で水と食料を取ってきたり、親から2週間くらい離れて自然体験をして帰ってくると、子どもたちは明らかに変わる。

デパートで虫を買って、カブトムシの手足を取り、もういちどセロテープで貼り付けようとする子の記事を読んだことがある。そんな国になりつつある。今の私たちの生活は電気と水道の上に成り立っている。しかし、人は電気や水道がなくても生きられる、そういう体験を持つと子どもたちは変わるということで、自然体験活動を始めた。もともとは教育の視点がベース。RACには、自然の持っている力を子どもたちや普通の人に伝えるinterpreter（注「通訳者、説明者」の意）になってほしい。それができる人を育て、今ようやくそのベースができつつある。これをどう生かすかによって、日本は変わる。ここまで皆さんが培ってきた知識や技術を誇りに思ってもらいたい。

この力を生かす取り組みの一つが昨年の防災キャンプ。同様に感じている市長は全国にすでにたくさんいる。これからいろんな行政を巻き込んで、自然体験活動を広めていきたい。

平山：RACのトレーニングを受けたリーダーが、現在全国に4500人いて、力が蓄積されてきました。この全国大会を機にステップアップしていければと思います。防災との関連も含めて、皆さんに今後の抱負をお願いします。

山口：学校の立場から。5年生を対象に行った昨年度の防災キャンプ、今年度の防災スクールの実践を踏まえ、今度は学校全体として全学年で、防災教育に関する取り組みを充実させていこうと考えている。自分の命は自分で守ることができる力を身につけさせたい。そして保護者、地域との連携を強め、子どもたちが見附への誇りと愛着を持ち、一人一人がふるさとで力強く生きていけるようにしていきたい。

佐藤：つい最近、カヤックを引き取ってくれないかと1本の電話があった。小貝川の氾濫に備えてカヤックを所有していたが、取手市から引っ越すことになったので、とのこと。そこで昭和の2回の大洪水を経て、行政の大変な努力により、利根川と小貝川の堤防が強化され、守られた環境になっていたことを再認識した。再度川を見直し、地域と行政が協力して、小貝川だからこそやらなければいけない新たな防災教育に取り組んでいきたい。

渥美：我が国は、今後の大震災の脅威を抱え、各地で起こる災害がほとんど常態化しているような状況である。その中で、防災力を上げることは国力を上げることに一直線に関わってくる。次の世代を担う子どもたちの防災力を上げ、RACや行政が一体となって国際社会に誇れる防災国家になるように努力していきたい。

久住：昨年の防災キャンプを経験し、全国の自治体も求めているものなのではないかと感じている。同じような形で全国の自治体へ広まっていくだろうと期待している。今回は宮崎県の延岡市で全国大会が開催される。全国大会に集まった方々が地元へ帰り、情報を伝えることで、その自治体がまた動き始めているという波及効果を感じられたことが嬉しい。求めている自治体はたくさんある。他県に対してエールを送りたい。

平山：防災国家をしっかりと作って行こうという話がありました。我々の仕事はまだたくさんあります。リーダーは現在4500人。目標は1万人。もっとたくさんの方々に関わっていただきたい。そして、ここに集まっているRACの仲間は、それぞれ自分のフィールドを持っています。その場所へ、今日聞いた話や勉強すべきこと、そんなものをしっかりと持ち帰り、今後頑張っていきましょう。ありがとうございました。



第一分科会『防災教育』

コーディネーター：金沢 緑 氏 (NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会)

○話題提供 相馬 孝 氏 (小川原湖自然楽校)

青森県三沢市、小川原湖自然楽校で、子どもたちを対象に自然体験活動を行っている。

本日は、当団体が小学校で実施した防災キャンプと、自然体験楽校として行った防災キャンプを比較しながらご紹介させていただく。

六ヶ所村尾駁小学校で行った防災キャンプは、学校の敷地内で、5年生を対象にした宿泊学習として行った。

学校に新たな体験学習を取り入れてもらうのは難しい。一方で、従来から5年生を対象に行われている宿泊学習は、毎年同じ型どおりの内容でつまらないと考えている。この小学校では校長先生が我々の提案に共感してくれて、宿泊学習を防災キャンプとして行うことで、実施が可能となった。

学校では通常難しい火を使う活動も行った。ロケットストーブを使い、ブロックを組んでかまどを作って調理をした。また校長先生の希望で、青森県で一番大きな湖である小川原湖とそれにつながる尾駁沼で、干潮と満潮に合わせて海と沼を筏で往復するという取り組みもした。

夜は学校に泊まり、翌日は防災施設の見学をしてキャンプを終えた。

一方、自然体験楽校のスタイルで独自に実施した防災キャンプでは、募集により4年生4名が参加。

地震や津波が起きた後、どうやって生きていくかを体験する。ブルーシートを張って屋根を張り、毛布やTシャツで担架を作る、水で流された時に使えるもの、水に浮くものを学校の中から探させたりする。ロープワークの練習をすると、覚えの早い子がまず先に覚えて、他の子に教えてくれる。外では火起こしの練習や350ml缶を使ったごはん炊き、お風呂など。

後者が、我々が本来考えている防災キャンプではある。しかし、学校では教科としてよりも宿泊学習として入っていく方が受け入れられやすい。まずはそれを三沢市だけではなく他の自治体でもやってみて、同じスタイルを広げていきたい。そこから学校側も教科としてではなく、防災教育を学校教育の中に受け入れられるようになるのではないかと考える。

○意見交換

- ・防災教育を学校にどのようにして受け入れてもらうかは、全国各地で活動するみなさんに多く共通する課題だと考える。
- ・学校の取り組みは、校長先生によって変わる。学校に新しい取り組みを受け入れてもらうには、時間をかけて信頼関係を築くことも必要
- ・熱心な先生がいたとしても、その先生はいずれ学校を変わってしまう。その後も取り組みが継続する仕組みづくりが大事。
- ・教師のみなさんにRACリーダーの資格を取ってもらいたい。しかし、RACリーダーの資格を得るための21時間、3日連続の研修受講という条件はかなりハードルが高い。教職員免許を持っていれば、一部を代替するような、ハードルを下げる工夫が必要。
- ・文科省を動かし、図書館司書や保健師が学校には必ず配置されているように、防災に関する資格者が学校設置に必要な資格要件にできればよい。
- ・文科省を動かすという、正面からの方法だけではなく、側面からの活動支援も必要だ。地域支援本部を置き、学校側が「防災教育をしたい」と考えれば、やり方がわからなくても支援本部に相談すればコーディネートしてくれるという仕組みがあれば入りやすくなる。
- ・行政は、自治体によって災害に対する温度差が大きい。モデル自治体をつくることで、うちもやらなくてはと手を上げる自治体を増やす方法もある。
- ・自治体の政策や長期ビジョンの中に、自然体験や防災教育が入るよう行政に働きかけを行っている。政策として方針が決まっていれば、学校も取り組まざるを得ない。政策として明示されていれば、首長が変わっても取り組みは続く。経済性を求めるところを明確にし、予算付けをして行政が逃げられない仕組みづくり

に取り組んでいる。

- ・学校を動かすには、PTAや地域を巻き込むことも重要。

○まとめ

- ・正面突破の方法として、文部科学省を動かし、防災教育を学校教育に組み込むための制度づくりや予算付けをしていく必要がある。1人の先生の熱意で取り組むだけではなく、継続的に取り組みを続けるためには、正式な学校カリキュラムに組み込むことが絶対必要。しかし、簡単ではない。
- ・側面から学校を動かす方法として、地域の支援体制を整えたり、PTAに話を通して周囲を固めたりといった方法が考えられる。
- ・行政を動かして制度を整えること、学校長を動かして学校単位でできること、PTAや地域の力を借りてできること、それぞれを整理してうまく学校を動かし、防災教育を学校教育に取り込んでいけるように、RACの持ち札を増やしていかなければならない。
- ・今後も活動を進めていくために、お互い理解し合いながら今後の検証を行い、情報交換をするチームを作り、さらなる前進を図る。



第二分科会『防災と地域コミュニティ』

コーディネーター：名和 あけみ 氏（NPO法人 長良川環境レンジャー協会）

○話題提供者：二見 拓也 氏（NPO法人 鶴見川流域ネットワーク）

鶴見川は、川崎市から横浜市を流れる一級河川であり、長さ42.5km、流域の人口188万人が住む典型的な都市河川である。

鶴見川流域ネットワークを事務局とし、47の市民団体が連携・協力して活動している。

国土交通省の施設、鶴見川流域センターの運営を行っている。ここは鶴見川多目的遊水地という防災施設も兼ね備えており、治水展示、防災展示、観察会や工作、水槽の展示、学校や、ガールスカウトなどの団体受け入れ、シンポジウムの開催などを行っている。

9月23日に防災体験イベントを実施した。ハザードマップを使って洪水について知る取り組みを行ったり、空き缶での炊飯、消防体験、スローロープ体験、小さい子にもわかるように非常持ち出し袋の紙芝居などを行ったりした。

○意見交換

3つのテーマに分かれる。

①災害（水害など）の経験から学んだことから、今後どのようにしていけばよいか。

想定外の災害が増えている。地元の住民が顔の見える関係であることが大切。流域のそれぞれの流域に文化があり、それを理解することも大切。地域住民と団体と自治体をつなぐのがRACの役割。RACのことをどんどんと地元住民や自治体にPRをしていくことが重要である。

②地域防災活動、水防活動と企業とのかかわり

高齢者や障害者を災害時にどうやって誘導するか、ハザードマップを周知し、それを元に混乱を避けながらもどうやって避難をするかが課題。普段からの地域のつながりを強め、維持していく必要がある。災害に対する知識や水害時の体制などの情報を住民は知らない。団体間の連携を強め、コミュニティに働きかけていく。地域のリーダー（市長、会長など）が変わると体制や意識も変わってしまうことも問題で、同じレベルでの意識や活動を継続していくことにも意識を向ける。RACとしてこれらをどのようにコーディネートしていくか、それを考えていく。

③市民防災活動

学校を使って防災スクールなどを実施し、関心のある人を中心に防災活動を広めていく。

○まとめ

- ・防災力を地域で上げるためにRACとしてどうしていくべきか。
- ・災害時に地域コミュニティがどのように力を発揮するか、どのようにコミュニケーションをとるか。
- ・自治体や行政の情報発信を元に、団体が連携をして地域防災力を向上させる。
- ・そのためには日ごろの活動から自分の所属団体のことばかりではなくRACのことをPRし、信頼ある団体だということを広め、いざという時に力を発揮しやすいようにしておくことが大切である。



第三分科会『川と広域観光』

コーディネーター：大内 雅司 氏（岩尾内ダム水源地域ビジョン推進会議ASOVI）

○話題提供者：柴田 勉 氏（TERRA子野アドベンチャー）

熊本のTERRA子野アドベンチャーは南阿蘇村で活動を行っており、大人は子どもに帰り、子どもは子どもらしくをテーマに活動している。小学生の総合学習の支援や、キャニオニング、トレッキング、カヌー、カヤック、ヨットなどの体験メニューの提供も行っている。キャニオニングについては落差40mのアユ帰りの滝を浴びてスタートする。日本で唯一の温泉の滝もある。岩のカーテンのように見える柱状摂理での記念撮影も行っている。国際交流も行なっており、地域資源を活用したインバウンド推進事業では韓国からのお客様の誘致を進めている。実際に韓国の方が来られた。何度でも来たいと思うようなフィールドづくりを進めたいと思う。延岡リバーネットワークとの連携も進めているが、広く九州各地との連携を進めて行きたいと思う。また、200名ほどの防災キャンプの計画もある。面白いのは当たり前、また来たくなくて、地域の観光につながるようにしていきたいと思う。お客様はスタッフになることもあり、つながりがどんどん広がっている。村のペンション、カフェなども互いに紹介し合うなど連携づくり、カナダ、オーストラリアなどからの観光客誘致も進めている。受け入れる側のスキルの問題もあるので、月一回の割合でミーティングをおこない、自分たちが客になり相互にスキルアップを図っているところである。

○意見交換

- ・川と広域観光は、各地では取り組みがすでに始まっている。国交省でも観光を推進する制度を制定し、補助金を交付し、モデル地域づくりを進めている。
- ・当初は子どもたちとの遊びから活動が始まり、村とのつながりが生まれ、そこから徐々に観光の視点が生まれてきた。徐々に活動を広げていくのが良い。
- ・国道49号沿いに河川国道事務所の協力で「道の駅、川の駅、ひとの駅」が整備されている。道の駅からの要請で「阿賀川達人の会」でメニューができないか要請があった。連携を考えているが、上流にダムが多くあり、渇水期があったり、川遊びに適した場所が離れているなどの問題もあり、今後話し合いを進めていく段階。
- ・川遊びと観光について、国交省から要望があったが、こちらのプログラムとはうまくマッチングできなかった。
- ・私の団体にも観光という名目はないが、遊びの中から観光協会とのタイアップが生まれた。生き残りのためにも、観光客誘致と資金調達を進めているところ。各団体のプログラムを旅行会社などに提供する方法もあるので、定款に観光が入ってなくても良いのではないかな。
- ・阿賀川ではカヌーの発着所を整備したが、渇水期には水がなくて観光客は利用できない。
- ・白川では護岸工事が行われ、サイクリングコースの整備を行っているが、それだけでは人は集まらない。水辺に背を向けていた方向性を改善し、スポーツや福祉などさまざまな面からのアプローチをしていくことが必要。
- ・大垣市ではたらい舟の体験をやっている。観光協会からの依頼で体験メニューを提供するようになった。
- ・京都の保津川など、もともと川下りをやっているところで競合することはないか。
- ・最近カヌーを楽しむ年齢層が二極化している。65歳以上になって山登りができなくなり、負担の少ないファンカヤックを購入する層と、子供がいるファミリー世帯とで85%を占めている。カヌーは買い替え需要があまりない。今は6千から7千艇、バブルの時期は3万艇ほど売れた。カヌー人口は蓄積されてきているので、どこへ行っても見る事ができる状況。
- ・バブルにはカナディアンが2万台売れたが、今は100分の1になったとのこと。ただ、スポーツショップの商品は充実しており、釣りのブームもある。水辺のスポーツに需要はある。65歳以上の自然体験の経験がある人に川に来てもらう、TDLではなく川に来てもらえるか。
- ・魚野川で川の駅を検討。上流と下流、それぞれの地域と健康や防災などを複合的に組み合わせることで、広域観光にもっていけると考える。他分野との接点が必要。

- ・目的と手段の混同がある。川に親しむことと観光を目的にするのは意味合いが異なる。レジャー、物産、ウリとなるコンテンツは何か、地域が得意とする分野で売り上げを上げることが必要。事業が競合しても、全体としてどこからか収益が出ていればよいという考え方もある。
一水系がひとつの観光圏を持つようになればよいのではないかと考える。川の体験ツアーとして、下流から源流まで歩くプログラムを持っているところがある。そういうものがあれば、川の駅、道の駅、カヌー、鮎釣りなど途中のコンテンツも楽しむことができる。
- ・「観光」＝「人を呼ぶこと」ではない。地域の素材をまず考え、川という素材をどのようにプロモートするかが重要。どうやって組織として運営していくか、持続的な運営にはルール作りも必要。ボランティアベースか、商業ベースかの選択もしなくてはならない。それらを整理した上での広域観光が必要である。
- ・RACの基本は川に入ってもらふこと。構成員は商業的組織から持ち出しのボランティアまでさまざま。教育旅行では民業圧迫が起きている地域もあり、上記のような整理が必要。

○まとめ

- ・地域の資源に合わせたメニューづくりが必要。
- ・自分たちの持つ素材の中から、ターゲットとなる年齢層に合わせたメニューを作る。
- ・川遊びをしながらの観光をする上で、ルール作りが必要。
- ・川下りだけではなく、地元の歴史文化の紹介など、他分野の組織との連携を図り、人を呼び込む。
- ・リピーター確保につながるサービスの提供を。



第四分科会『NPO活動と防災』

コーディネーター：土井 裕子 氏（NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク）

○話題提供者：宮尾 博一 氏（NPO法人 川に遊ぶ体験活動協議会）

防災船着場の利活用について紹介させていただく。資料の最初に書いてあるように、東京低地河川活用推進協議会は、国交省発注の業務のなかで設置されているものである。

東京の江東三角は、隅田川、荒川で囲まれたゼロメートル地帯のこと。荒川は人工的に造られた放水路。この江東三角地帯は浸水しやすい土地で、大震災が想定されていることから、いざというときに物資の運搬などに活用するために防災船着場があちこちに造られた。いくつかの防災船着場については現在、水上バスなどで使われているところもあるが、多くの船着場は河川管理者である役所が占有しており、安全などへの留意のために鍵がかけられていて使われていない。それを日頃から市民や事業者、市民団体に開放して、いざという時に使えるようにしておこうではないかという声が出てきた。活用推進協議会では、日常的に市民団体や事業主に開放するにあたり、使用団体の自己責任で良いではないかという議論をしている。しかし、一気に自己責任での開放とはいかず、ようやく現在、社会実験として開放する段階になってきた。RACも社会実験に手を上げている。11月には荒川ロックゲート周辺の防災船着場を使って講座を行う。今後も防災船着場を使ってRACリーダーなどの講座等を行なおうと思っている。現在、いろいろな機関でも「自己責任」をキーワードに意識が変わりつつある。今後、全国の様々な河川施設を自己責任のもとで開放してもらえるようにしていきたいと思っているが、この取り組みがそのきっかけになればと考える。

○意見交換

- ・災害時に運河に入ることができると、今までと違う救助の方法や対応が可能になる。阪神淡路大震災では物資が届かない中、新聞が川から運ばれてきて情報が伝わり、被災者の安心につながった。東京で進められている防災船着場を使った社会実験が、全国に広がってほしい。
- ・Eボートやカヤックを降ろすとき、防災船着場は護岸が高すぎて使いにくい。それを理由に役所は防災船着場を手漕ぎボートに貸すことを渋っている。NPOには貸さない方がよいと勝手に判断してしまっている。
- ・全国の防災船着場については、使う側の自己責任で、自由使用にすればよいと考える。
- ・全国各地の防災センターでは土日には職員がいなくなるため、団体が使って活動している場所もある。空いている日に市民団体を入れて活動できれば、一年中川を誰かが見ている状態ができる。
- ・昨日のパネリストの発言にもあったように、防災船着場を造っている人たちは川を外から見ている。川を内側から見て活動している市民団体のことは、意識も期待もしていない。しかし、今後活動を進めていくためには、防災に関する活動を草の根的に展開して、役立つ団体として認知され、行政からの信頼を得ることが必要である。
- ・川の中と外の連携ができていないこともある。五ヶ瀬川では軽トラが入れる場所が1kmおきにある。近くまで機材を運べるような川と陸の連携も考えていきたい。
- ・長野県大町市では指定管理を受け、「道の駅」や「川の駅」をベースにラフティングなどを行っている。近くにはお店や温泉があり、人が入れるスペースもある。船着場は釣り、ラフティングなどに自由使用しているが、特に問題は起きていない。物資を運ぶのにも便利。そういう場所を防災にも活用していきたい。そうした活用法を全国に広げれば、防災意識の向上にもつながる。
- ・長野県は坂村の分校の施設が廃校となったので、有効活用としてレストランにしている。宿泊施設もあり、これから活用していきたい。
- ・全国で進む過疎化に伴い廃校になった場所などを大きな防災ステーションにできるとよい。
- ・防災船着場の利用については、3年近く議論しているが、まだ手続きに時間がかかっている。議論を積み重ねた上で、事故が起こっても使用者の自己責任だと言えたとしても、一般開放するにはまだいろいろな課題がある。水に落ちてしまった場合の安全対策やルール作りも必要。
- ・江東三角地帯の船着場では、はじめは運行事業者だけが社会実験の対象だった。行政などにRAC指導者

の活動や市民団体に対する信用を植え付けていく必要がある。下から話を上げるのは時間がかかる。上から落としていく必要がある。

- ・川は観光や通勤、防災など、各地域によって船着場の使われ方も異なる。RACがそれらを含め支える団体としてあるべき。
- ・要綱にRACを入れてもらい、利用協力団体として認識してもらうのがよい。
- ・白書に協力団体としてRACを入れれば、全国的に注目される。
- ・指導者講習の仕組みは、昔、国交省が非常に力を入れて作ったシステム。RACの指導者資格を取って、資格を取っただけではなくそれを生かす場所が必要。
- ・イベントの時や災害の時、必要に応じて河川使用許可を取って鍵を借りるのではなく、防災船着場の鍵を1年更新で借りたままにできるとよい。漁協の利害関係への配慮なども含めて、いつでもどこでも入れないのが川。特に漁協との関係は難しい。そこに一般の人が入って行けるよう、RACが遊べる場所を案内し、川とのつなぎ役になればよい。
- ・現在、地域の消防団は実質的に水防活動がメインになっている。信頼性のある水防活動を行うために、RAC指導者の防災活動を認知してもらい、水防団としての活動もできるとよいのでは。

○まとめ

RACの防災活動としての今後の方向は、以下のようにまとめられる。

1. 自己責任で防災活動をする団体としての登録（人材、資材、陸水）
2. 自己責任で施設を利用できるよう信頼を得る
3. 河川利用協力団体として明記し、RACを登録
4. 防災国家を目指す

現在の川は、日常使えない状況で、見るだけになってしまっている。川の何が危険かを理解し、川を使っての産業ができれば、地元に帰ってくる若者も増える。東京オリンピックで日本に来た人たちが、日本中で川を楽しんで帰ってもらえるようにしたい。



第13回 川に学ぶ体験活動全国大会inにいがた見附
実行委員会・運営委員会・事務局名簿

実 行 委 員 会			
	氏 名	団 体 名	役 職
委 員 長	久 住 時 男	新潟県 見附市	市 長
副委員長	藤 吉 洋一郎	NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会	代表理事
委 員	平 山 康 弘	NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会	理 事
委 員	常 山 修 治	国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所	所 長 (～H25.8.31)
委 員	福 渡 隆	国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所	所 長 (H25.9.1～)
委 員	福 渡 隆	国土交通省北陸地方整備局信濃川下流河川事務所	所 長 (～H25.8.31)
委 員	瀬 崎 智 之	国土交通省北陸地方整備局信濃川下流河川事務所	所 長 (H25.9.1～)
委 員	渡 邊 和 敏	新潟県土木部河川管理課	課 長
委 員	齋 藤 渡	大平森林公園指定管理者(株式会社 笹原建設)	代 表
委 員	今 井 弘 志	刈谷田川かわまちづくり実行委員会	代 表
委 員	稲 庭 守	NPO法人 キズナの森	代 表
委 員	池 嶋 利喜夫	北谷北部くさなぎコミュニティ	会 長
委 員	布 川 治 夫	見附市校長会	会 長
委 員	柴 嶺 哲	NPO法人 見附市スポーツ協会	会 長
委 員	山 下 匡 紀	NPO法人 地域交流センター	研 究 員
委 員	飯 塚 勝 義	地域復興調査研究協議会	会 長
委 員	鵜 頭 明 男	見附市まちの駅連絡協議会	会 長
委 員	吉 田 正 宏	見附市建設課	課 長
委 員	松 井 謙 太	見附市教育委員会 学校教育課	課 長
委 員	中 澤 博	見附市消防本部	消 防 長
運 営 委 員 会			
	氏 名	団 体 名	役 職
委 員 長	犬 塚 守 明	刈谷田川かわまちづくり実行委員会	
委 員	稲 川 貢	国土交通省北陸地方整備局 信濃川河川事務所	河川環境課長
委 員	二 木 渉	国土交通省北陸地方整備局 信濃川下流河川事務所	管理課長
委 員	棚 村 一 寛	大平森林公園指定管理者(株式会社 笹原建設)	大平森林公園管理責任者
委 員	近 藤 伸 彦	NPO法人 キズナの森	
委 員	武 田 一 夫	北谷北部くさなぎコミュニティ	
委 員	中 島 賢一郎	NPO法人 見附市スポーツ協会	事務局長
委 員	平 山 康 弘	NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会	理 事
委 員	本 間 貴 子	RACリーダー	
委 員	湊 屋 一 樹	見附市学校教育課	副主幹兼係長
委 員	青 柳 充	見附市建設課	主 査
事 務 局			
	氏 名	団 体 名	役 職
	大 井 里 美	NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会	
	金 井 薫 平	見附市企画調整課	課 長
	池 山 一 郎	〃	課長補佐
	金 子 英 子	〃	総括主査
	武 田 祥 尚	〃	主 任

(順不同・敬称略)

第13回

川に学ぶ体験活動 全国大会 in にいがた見附

テーマ：地域の防災力を高める



プログラム

平成25年10月12日^土・13日^日・14日^月祝

見附市文化ホール アルカディア 小ホール

主催■第13回川に学ぶ体験活動全国大会inにいがた見附実行委員会

共催■NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会

後援■国土交通省、文部科学省、環境省、新潟県、新潟日報社、朝日新聞新潟総局、共同通信社新潟支局、産経新聞新潟支局、時事通信社新潟支局、日本経済新聞社長岡支局、毎日新聞新潟支局、BSN新潟放送、N S T、TeNYテレビ新潟、UX新潟テレビ21、エフエムラジオ新潟、FM PORT 79.0、FMながおか80.7、長岡市、三条市、見附市教育委員会、公益財団法人河川財団、公益社団法人日本河川協会、一般財団法人河川情報センター、NPO法人自然体験活動推進協議会、一般社団法人北陸地域づくり協会、公益財団法人リバーフロント研究所（順不同）

この大会は、〈公益財団法人河川財団河川整備基金〉の助成を受けています。

開催趣旨

「今こそ川の指導者の出番だ！」をスローガンに「第13回川に学ぶ体験活動全国大会 in にいがた見附」を開催します。

今回の全国大会は一級水系信濃川の流域を開催地として、水害に対する「地域の防災力を高める」を全体テーマとして実施します。過去幾多の水害にみまわれた見附市においては、昨年、今年と小学生を対象に防災キャンプを実施しました。地域に根差した生きる力を養うこと、地域の自然の二面性を理解すること、地域、学校などとの間のパートナーシップを持続できるシステムづくりを目的に実施したところですが、これもRAC指導者の持つノウハウによって成功に導くことができました。

そして、行政、市民、地域の協働を通して活動拠点の安全整備を進め、自然の魅力を磨き、専門的な能力をもって危険対応を実施できる安心サポートを充実させれば、これまで以上に多様・多彩な水辺体験活動のチャンスが増えます。

今大会では、その一環として「日本一の大河・信濃川川下り」を実施するほか、過去の災害からいかに防災・減災に取り組んできたかを学ぶことのできる「道の駅パティオにいがた」視察も実施いたします。

日常的な川を楽しむ自然体験から、災害時の支援活動に至るまで、その活動を支えるRAC指導者をはじめとする川の指導者の活躍の場が拡大し、指導者の持つ知識と経験を生かすしくみが全国に広がっていく契機となる大会となることを期待するとともに、多様な川辺活動が地域の防災力を高め、ひいては持続可能な豊かな地域社会づくりにつながるというメッセージを全国に発信する大会となることを期待します。

第13回 川に学ぶ体験活動全国大会 in にいがた見附

1日目 10月12日(土)

13:00～ 開会式 <会場：見附市文化ホールアルカディア小ホール>

【主催者挨拶】

大会実行委員会 委員長 久住 時男

NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 代表理事 藤吉 洋一郎

【祝 辞】

国土交通省水管理・国土保全局河川環境課長 渥美 雅裕 様

新潟県知事 泉田 裕彦 様

13:20～ 基調講演

【演 題】『地球を歩いて見たこと、聞いたこと、考えたこと』

【講 師】探検家・医師・武蔵野美術大学教授 関野 吉晴 氏



関野 吉晴(せきの よしはる) 氏プロフィール

一橋大学在学中に探検部を創設、アマゾン全域踏査隊長としてアマゾン川全域を下る。その後医師となり、南米への旅を重ねる。1993年から2002年にかけて、アフリカで誕生した人類がユーラシア大陸を通してアメリカ大陸に拡散した道を、南米最南端から逆ルートでたどる「グレートジャーニー」に挑んだ。2004年からは「新グレートジャーニー 日本列島にやって来た人々」をスタート。シベリアから稚内までの「北方ルート」、ヒマラヤからインドシナを経由して朝鮮半島から対馬までの「中央ルート」、インドネシア・スラウェシ島から石垣島までの「海のルート」を踏破。著書、写真集多数。1999年植村直己冒険賞受賞。



14:50～ パネルディスカッション

【テーマ】『地域の防災力を高める～今こそ川の指導者の出番だ！～』

【コーディネーター】

平山 康弘 氏 (NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 理事)

【パネリスト】

渥美 雅裕 氏 (国土交通省水管理・国土保全局河川環境課長)

山口 玲子 氏 (見附市立名木野小学校長)

佐藤ともえ 氏 (NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 理事)

久住 時男 氏 (見附市長)

15:50 ～ 活動事例報告

○地元活動事例報告

- 1.刈谷田川かわまちづくり実行委員会
- 2.見附市教育委員会
- 3.NPO法人 キズナの森
- 4.NPO法人 MTNサポート
- 5.財団法人 魚沼市地域づくり振興公社

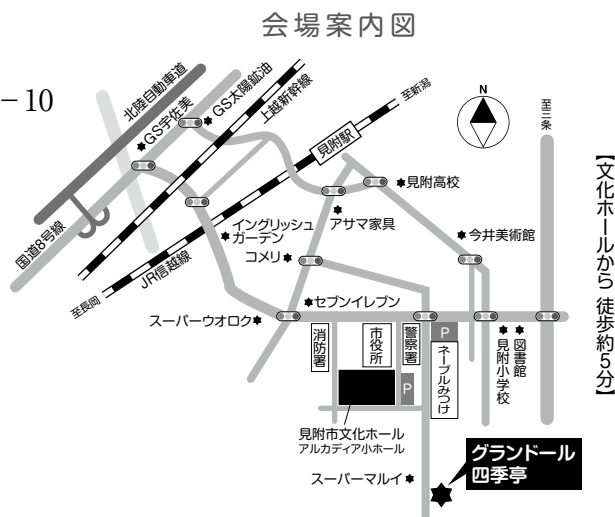
○全国活動事例報告

- 6.NPO法人 会津阿賀川流域ネットワーク
- 7.NPO法人 ひむか感動体験ワールド
- 8.NPO法人 長良川環境レンジャー協会
- 9.目黒川流域交流会

18:00 ～ 交流会

【会 場】 グランドール四季亭
新潟県見附市新町2丁目7-10
TEL 0258-63-5135

【参加費】 4,000 円



2日目 10月13日(日)

9:00 ～ 分科会 テーマ

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 第1分科会 「防災教育」 | 【会場】 市役所 4階 401 会議室 |
| 第2分科会 「防災と地域コミュニティ」 | 【会場】 市役所 4階 大会議室 (中) |
| 第3分科会 「川と広域観光」 | 【会場】 市役所 4階 大会議室 (西) |
| 第4分科会 「NPO 活動と防災」 | 【会場】 市役所 3階 301 会議室 |

10:30 ～ 分科会報告

【会 場】 見附市文化ホール アルカディア小ホール

11:00 ～ 全体会 (閉会式)

【次期開催地引き継ぎ】

第13回大会から第14回大会へのバナーの引き継ぎ
次期開催地挨拶

【閉会挨拶】

大会実行委員会 副委員長 藤吉 洋一郎
NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 副代表理事 藤芳 素生

日本一の大河・信濃川川下り 定員 100 名、参加費 1,500 円

- 12:00 ~ 川下り一般参加者受付
12:30 川下り参加者、文化ホール前集合。確認後、バスに乗車し、出発
13:15 信濃川妙見堰下流スタート地点到着、川下り開会式
着替え、ライフジャケット着用など準備
各自荷物はバスに
13:45 川下りスタート
16:00 長岡市大手大橋ゴール
16:10 Eボート撤収
16:30 川下り閉会式
16:40 バス出発
16:50 頃 J R 長岡駅経由
17:30 頃 見附市文化ホール着、解散
- ※持ち物 ・濡れてもよい服装、着替え、帽子、日焼け止め、飲み物、タオル、川に入る靴
(クロックス、サンダルは濡れると滑りやすいので不可)
・ライフジャケット、パドル、Eボートは実行委員会で手配します。
・スタッフを含め 10 人乗り Eボートで川下りします。



3日目 10月14日(月・祝)

エクスカーション 定員 25 名 1,500 円(食事代別)

- 9:00 ~ エクスカーション参加者、文化ホール前集合。バス出発
10:00 長岡市役所山古志支所到着
山古志地域の中越地震からの復興状況視察
11:45 山古志地域発
12:30 道の駅パティオにいがた着、視察(昼食)
13:50 パティオにいがた出発 ~ J R 見附駅経由
14:00 見附市文化ホール着、解散

団 体 名	刈谷田川かわまちづくり実行委員会
活 動 名	刈谷田川かわまちづくり
活 動 範 囲	刈谷田川流域
発表者プロフィール	刈谷田川かわまちづくり実行委員会 副代表 名古屋 茂樹
かつて「暴れ川」の異名をとった刈谷田川。過去幾多の水害を引き起こし、地域住民を苦しめてきました。その刈谷田川も災害復旧工事が完了し、貴重な地域資源としての川の持つ魅力に関心が高まりつつあります。実行委員会ではそこに着目し、堤防道路での「チャレンジ24kmウォーク」、「水辺の音楽祭」、子供を対象にした刈谷田川の歴史学習や魚のつかみどり、Eボート体験などを行う「わくわく体験塾」など、川を通じての市民の交流機会の拡大と川の魅力の発信に、知恵を出し合いながら取り組んでいます。	
 	

団 体 名	見附市教育委員会
活 動 名	防災スクール
活 動 範 囲	各小学校周辺地域及び刈谷田川
発表者プロフィール	見附市教育委員会 学校教育課 神林 俊之
市では、昨年度、文部科学省委託事業として、名木野小学校で2泊3日の「防災キャンプ in みつけ」を実施。その成果をもとに、今年度は、実施校を名木野小、今町小の2校に拡大し、地域の特色や実情を生かした1泊2日の「防災スクール」を開催しました。内容としては、ハザードマップを利用した危険箇所や避難の仕方の確認、非常食の缶詰パンなどを食べての学校での宿泊まり、川におぼれた人を助けるスローロープの練習やおぼれたときにペットボトルで浮く練習、7・13水害を経験した人からの体験談を聴くなど、中身の濃い2日間の共同体験を通じて、災害が発生したときに身を守ることできる、たくましく生き抜く力を養うことにつなげていきます。	
 	

団 体 名	NPO法人 キズナの森
活 動 名	災害を機に人の絆を考える
活 動 範 囲	新潟県見附市、長岡市
発表者プロフィール	佐藤 菜穂子（NPO法人 キズナの森 理事）
平成16年の7.13水害で見附・長岡の両市にまたがる刈谷田川の長岡市側堤防が決壊、多くの方々が被害を受けました。当法人は、見附・長岡両市住民、行政が一体となり、新しい地域を創造するため議論を重ね、発足した団体です。防災啓蒙活動や今年完成した防災公園の維持管理を通じ、住民間の交流、そして両市の交流・連携を行っております。3年前から地域内の商店と連携した「ハロウィンイベント」実施を通じての多くの子どもたちとの交流。7.13水害に犠牲になられた方々を追悼し、今後の防災のあり方を考える「キズナまつり」、そして公園の維持管理。今後もそれらの活動を通じ、地域の「キズナ」づくりを推し進めていきたいと考えます。発表では、当時保育園児（現在中学生）だった子どもによるレスキューヘリ救出談も行います。どうぞよろしくお願いいたします。	
 	

団 体 名	NPO法人 MTN サポート
活 動 名	次代を担う子供の育成
活 動 範 囲	長岡市小国町地域
発表者プロフィール	昭和17年生まれ、NPO法人の理事・事務局 小国生物友の会事務局 高橋 実
市立渋海小学校4年生の総合学習支援として取り組んでいる。「ふれる つながる ふるさとの川 渋海川」をテーマに生き物調査と川流れ体験・源流探検・鮭の稚魚飼育と放流などの学習支援をしている。 ①生き物調査と川流れ体験：夏休み前、タモ網や投網で生き物調査を行うとともにカヌー体験やゴムボートによる川下り、川流れを体験する。 ②源流探検：渋海川の源流を訪ねて長野県境まで遡る。途中瀬替えの様子や上流と下流のつながりを学習する。 ③鮭の稚魚飼育と放流：平成9年から鮭の稚魚を飼育し、放流している。	



団 体 名	財団法人 魚沼市地域づくり振興公社
活 動 名	Eボートで地域交流促進・環境学習
活 動 範 囲	魚野川・信濃川・奥只見湖
発表者プロフィール	財団法人 魚沼市地域づくり振興公社 今井 正樹
魚野川川下り・小学校関係の環境学習・ダム湖での利用・スキー場でのスノーEボート 等	



団 体 名	特定非営利活動法人 会津阿賀川流域ネットワーク
活 動 名	地域防災・住民参加型河川管理について
活 動 範 囲	阿賀川流域全川
発表者プロフィール	高橋 利雄 特定非営利活動法人 会津阿賀川流域ネットワーク 理事長 (RAC トレーナー／阿賀川・川の達人の会 顧問)
【設 立】平成14年8月29日 任意団体 会津阿賀川流域ネットワーク設立 平成16年5月27日 特定非営利活動法人 会津阿賀川流域ネットワークへ移行 【行動宣言】豊かな自然・歴史と文化の会津。母なる川、阿賀川と活力ある流域づくりをめざし、その実現を図るため流域の皆さんと共に、私たちは行動します。 当会は、設立当初から水環境保全の啓蒙および流域水環境に係る事業を行政機関との連携により、その推進を図ってきました。今後においてもこれまでの事業を継続的に実施すると共に、会員団体との協働のもと、次世代の人材育成を図るため川の指導者育成、更には会津水環境を学ぶ総合的な学習の時間の支援を行い、子どもたちの水環境への関心度の向上を図り、阿賀川流域水環境保全に力を傾注していきたいと思っています。また、住民参加の堤防除草を原点として行ってきた河川管理活動支援が、地域の川は沿川住民が自分たちの手で、守ろうと自主防災心を育み、現在では災害防止の一翼を担っています。当会は、この心を更に大きなものに育てていきたいと活動しています。	



堤防除草作業



総合的な学習の時間の支援



河川環境保護(希少種オキナグサ)

団 体 名	NPO法人 ひむか感動体験ワールド (ノベ☆スタ)
活 動 名	アウトドア体験を活用した広域観光・地域づくり事業
活 動 範 囲	宮崎県県北エリア
発表者プロフィール	NPO法人 ひむか感動体験ワールド 事務局長 / RAC トレーナー 成崎 聡

ひむか感動体験ワールドは前身となる、平成22年2月25日に任意団体として設立された「のべおか感動体験案内人連絡協議会」より、平成24年9月に法人化し、現在に至っています。

設立以来、恵まれたフィールドを生かした各種体験活動に取り組み、延岡市周辺エリアの素晴らしさを市内外に発信しながら、同市及び県北エリアの観光推進に努めている。「海」「山」「川」の3つのフィールドを基本に約30のプログラムを、約30名の案内人がガイドを行っています。活動エリアを広くひむか一円に広げるとともに、体験活動のみならず、自然環境の維持保全活動、青少年の健全育成活動、学術・文化・スポーツの振興を目指した活動、さらには交流人口増加に向けた様々な観光事業も同時に展開しています。また、県、自治体と連携しての地域づくり事業にも参画し、地域の活性化にも努めています。

団 体 名	NPO法人 長良川環境レンジャー協会
活 動 名	自然環境教育活動と地域で活躍するエコリーダー育成
活 動 範 囲	木曽三川（長良川流域全体、木曽川、揖斐川）
発表者プロフィール	田中 利弥 学生会員 滋賀大学教育学部1回生、小学4年生から長良川環境レンジャーの活動に参加、水生生物調査や水辺の環境学習を通して環境保全活動に取り組んできました。

長良川を中心とした河川の環境保全を図るため、流域の市民、企業、行政と連携しながら清流長良川を次の世代に引き継ごうと様々な活動をしています。河川利用者のマナーアップ向上を図る啓発活動や、長良川上流～下流までの連携ゴミネットワークづくり、木曽三川の流域市民・企業等との連携による水質調査などの一斉環境調査、水生生物調査体験学習会などを実施しています。継続的な取り組みとして特に力を入れている「自然体験活動を通しての環境教育活動」では、各流域の市民団体・企業・地域・学校と連携しながら、子どもの水辺安全講座や年間プログラムによるエコリーダー育成講座（ながらっ子自然体験活動）を開催しています。

長良川中流域にてEボート川下り

木曽川中流域にて水生生物調査

団 体 名	目黒川流域交流会
活 動 名	目黒川流域での地域防災の取り組み
活 動 範 囲	目黒川流域（世田谷区、目黒区、品川区）
発表者プロフィール	原 一宏 目黒川流域交流会 世話人

目黒川流域交流会は、目黒川で子ども達が遊べる環境づくりを目指して、流域の企業、商店街、学校と連携して活動しています。「防災はまちづくりから まちづくりは人づくりから」を合い言葉に、年間を通して活動を展開しています。

近隣の小・中・高校の授業において、目黒川の歴史から環境学習、防災教育を学んでもらうとともに、地域のお祭りなどの機会に「ハザードマップの見方」やスローロープを使った「レスキューチャレンジ」、「E ボート体験」などを開催しています。

また、携わるボランティアを養成するため、他地域での防災活動や被災地での支援活動の教訓を活かしつつ、行政、企業と合同の防災シンポジウムや防災ワークショップを実施しています。日頃からE ボートや清掃活動の際に、積極的に防災船着場を活用し、地域住民への普及啓発を行うとともに、発災時には防災船着場の開閉や、帰宅困難者の輸送など、具体的な活用方法を提案しています。

団 体 名	小川原湖自然楽校
活 動 名	学校連携は防災教育から
活 動 範 囲	青森県六ヶ所村
発表者プロフィール	相馬 孝（小川原湖自然楽校 代表）

地域の学校と連携するということで、なかなか教科に入っていない中、防災教育の観点から学校との連携を図ることが出来ました。校長先生との繋がりや、宿泊学習に防災キャンプを取り入れてもらうことが出来、9月5日、6日と行いました。初日はまず夜に使うLEDライトを製作し、その後はかまどを作り、ロケットストーブで火熾しの体験です。昼食後はタイヤチューブによるイカダで河口から尾駁沼まで満潮に乗って川を上りました。ゴール後はかまどで晩御飯の支度とドラム缶による露天風呂です。ドラム缶でお湯を沸かし、組み立て式浴槽に皆で入りました。初めての体験に子どもたちのテンションは上がりっぱなしです。2日目は朝食で棒パンを作ったり、村内にある防災施設の見学を行うなどして、地域での防災に関する知識が増えました。

ドラム缶風呂と組み立て式浴槽

かまどとロケットストーブ

団 体 名	NPO法人 鶴見川流域ネットワーク
活 動 名	流域市民団体の交流・連携活動
活 動 範 囲	鶴見川流域
発表者プロフィール	二見 拓也（事務局スタッフ）
鶴見川流域ネットワーク（TR ネット）活動は、バクの姿の流域地図を共有しながら流域規模の市民連携を進め、《安全・安らぎ・自然環境・福祉重視の川づくり・まちづくり》をとおして、持続可能な未来を開く新しい流域文化の育成を目指す、流域市民団体の交流・連携活動（ネットワーク活動）を行っています。TR ネット活動は流域で活動する 47 団体の連携組織「連携鶴見川流域ネットワーク（連携 TR ネット）」と、NPO 法人鶴見川流域ネットワーク（npotr ネット）の協働により進められています。   活動拠点における定例会の様子 市民団体の方々とクリーンアップ	

団 体 名	TERRA 子野アドベンチャー
活 動 名	野外活動
活 動 範 囲	南阿蘇を中心とした九州一円
発表者プロフィール	柴田 勉 専門分野：川の指導者育成および子供の総合的学習、九州全域山岳ガイド、リバーガイド、乗馬、山のトレッキング、沢登り、沢下り、カヌー、ヨット、スクーバダイブ
世界の阿蘇カルデラを舞台とし、子供の総合的学習など五感を活かしたアウトドア企画・提案を行っている団体。今年度から南阿蘇村観光協会とタイアップし、南阿蘇の新たな観光資源の開発を担うキーパーソンとして活動している。また、宮崎県・延岡市にある北川流域リバーネットワークと連携し、熊本県だけでなく九州全体を繋ぎ、将来的に国内外からのアウトドア愛好者を受け入れる体制作りを力を入れている。  	

団 体 名	共和コンクリート工業株式会社（RAC 会員としての登録団体）
活 動 名	防災船着場の平常時からの活用についての試み
活 動 範 囲	荒川、隅田川、江東内部河川域
発表者プロフィール	宮尾 博一（一社）河川健康公園機構 顧問 共和コンクリート工業株式会社 副社長 NPO 川に学ぶ体験活動協議会 理事 RAC インストラクター、NEAL リーダー、PWET ファシリテーター技術士、一級土木施工管理技士
東京低地河川活用推進協議会（会長 宮村忠 関東学院大名誉教授、学識経験者 5 名、関係機関 7 名、行政機関 8 名で構成）では、H23 年度より、防災船着場の平常時利用を促進すべく、自己責任による民間開放について協議を進めてきている。 いざという時に防災船着場が機能するようにするためには、平時から使えるようにして慣れおく必要がある。また、鍵や安全管理についての課題も解決しておく必要があるという考えに基づくものである。 自己責任を基本とした船着場利用ルールができたので、本年 9 月 20 日～11 月 30 日に、上記河川に所在する 8 か所の防災船着場で社会実験を行う。社会実験は事前登録した事業者・団体が対象で、現在 9 者が登録済み。RAC も登録しており、講習会開催を兼ねて社会実験に参加する予定。  岩淵リバーステーション	

NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会（RAC）の発足の経緯

RAC の紹介

川に学ぶ体験活動協議会（River Activities Council 略称：RAC）は、川での体験活動を支援・推進するあらゆる活動を、時代に合わせて総合的に展開していくために、川をフィールドにして活動している各地の NPO 法人・市民団体が参加し、2000 年 9 月に設立され、2005 年 12 月に NPO 法人として登録した協議会です。

活動の目的

RAC は NPO 法人の定款において下記の通り活動目的を定義しています。

地域の振興には健全な流域の発展が不可欠であるという認識に立ち、これを構成する流域の歴史・風土・自然・生活・文化等をとおして、地球環境の根幹ともいえる水循環を担う「川」を理解する「川に学ぶ」という理念のもと、川及び水辺での継続的な体験活動とそれを支える「川の指導者」を育成する他、この活動の普遍化に向けて産学官民の連携のもと様々な分野や地域を越えた交流や支援を行い、同時に円滑な活動を推進するために必要な調査研究や普及啓発を図り、もって良好な河川・水環境の保全及び創出に寄与することを目的とする。

上記定款の目的に賛同する全国各地の市民団体や各種組織や有志により、先に制定された川に学ぶ理念を柱として指導者養成や各種普及活動等を全国各地で展開しています。

設立の背景

1997 年には河川法が改正され、1998 年 6 月、河川審議会「川に学ぶ小委員会」がまとめた「『川に学ぶ』社会をめざして」という答申が出されました。この答申では、「古来より、人は川の流れと共に暮らし、川を愛し、川から多くのことを学んできた。それは川が豊かな恵みをもたらし、交通・交易の場として人々の生活を支えてきただけでなく、人間の心性に関する文化を育んできたことの現れである。川とのつながりを取り戻し、川に学ぶ社会を創造すること。それはすなわち近代が生み出した地球規模の環境問題や私たちの心の危機を乗り越え、真に幸福な次期文明を探ることにつながる。なぜなら、川とは自然の生態系であると同時に、流域という共同体や生命のつながりそのもの。川に学ぶ社会を創造するため、まずは、川の魅力とその本当の姿、川の作法を守ってきた先人の知恵を広く多くの人に伝えることが大切」と提言されています。

当協議会（RAC）は、当該答申をきっかけとして 2000 年 9 月に設立されました。それまで各地域の実情に合せて展開されていた指導者養成活動をメンバーが持ち寄り、各地域の独自性を尊重しつつも共通理念に基づいたカリキュラムをつくりました。そして、川での安全で楽しい活動を普及し、川の危険性や川と人との繋がり等を正しく理解し伝えることのできる「川の指導者」の養成を全国各地で展開することとなりました。

全国大会（川に学ぶ全国交流会・川に学ぶ体験活動全国大会）の開催

川に学ぶ社会を全国各地域に広めることを目的とする当交流会は、平成 10 年度から平成 12 年度までは国主導で実施されてきましたが、平成 13 年度からは RAC の構成団体を事務局に、民間主導で開催されるようになりました。

開催地の会員団体が主体となり、開催地及び開催地の関係機関のご協力をいただきながら開催させていただいております。

平成 22 年まで下記のような河川・流域で開催し、開会式では、国土交通省、開催地の知事、市長などからも毎回ご挨拶をいただいております。

開催年	開催地	河川・流域
平成 13 年 第 1 回大会	岡山県岡山市	旭川
平成 14 年 第 2 回大会	福岡県北九州市	紫川
平成 15 年 第 3 回大会	徳島県徳島市	吉野川
平成 16 年 第 4 回大会	福井県武生市	日野川
平成 17 年 第 5 回大会	福島県会津若松市	阿賀川
平成 18 年 第 6 回大会	東京会場	
平成 19 年 第 7 回大会	岐阜県岐阜市	長良川
平成 20 年 第 8 回大会	熊本県熊本市	緑川、白川、球磨川、菊地川
平成 21 年 第 9 回大会	広島県広島市	太田川
平成 22 年 第 10 回大会	鹿児島県薩摩川内市	川内川
平成 23 年 第 11 回大会	神奈川県横浜市	鶴見川流域
平成 24 年 第 12 回大会	岩手県盛岡市	北上川流域

第13回川に学ぶ体験活動全国大会 in にいがた見附 報告書

発 行

第13回川に学ぶ体験活動全国大会 in にいがた見附 実行委員会

TEL 0258-62-1700 / FAX 0258-63-1006

〒954-8686 新潟県見附市昭和町2丁目1番1号

